



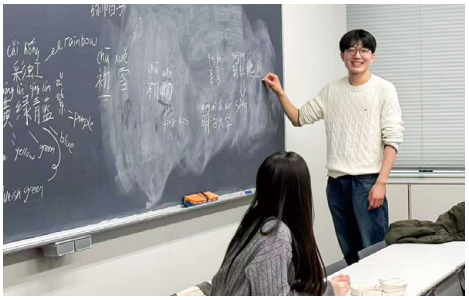
2025年度

明治大学
ボランティアセンター活動報告書

Meiji University Volunteer Center











MEIJI UNIVERSITY

ボランティアセンター
活動報告書発刊にあたって

石津 寿惠 ボランティアセンター長
（学務担当副学長・学生部長・経営学部 教授）

自然災害の頻発、学生を取り巻く環境・課題の多様化・複雑化、社会貢献への意識の高まりなどからボランティア活動は質的にも量的にも拡充してきています。一般的にボランティアとは「自発的な意思に基づく他人や社会への貢献」を指し、その活動がボランティア活動と言われます。活動の性格としては「自主性（主体性）」、「社会性（連帯性）」「無償性（無給性）」等が挙げられ（厚生労働省社会・援護局地域福祉課（2007）『ボランティアについて』p.1）、明治大学においてもこういった性格を踏まえた様々な取組みが活発に行われています。

特に本学では、支援する側からそれを受ける側へという一方通行の関係ではなく、場面に応じて学生の相互作用（ピア・サポート）に着目した活動をすることを一つの方針としています。そして、キャンパスごとに設置されている各ボランティアセンターにより、キャンパスの特性に配慮した多様な活動が行われています。この報告書はその活動状況を具体的にまとめたものであり、学生、関係教職員の皆様にセンターの取組をご理解いただき、更なる活動の活発化のために一層のご支援いただけたらという思いで発行されたものです。

内閣府調査によりますと、2024年の1年間にボランティア活動をしたことがある者の参加理由として「社会の役に立ちたいと思ったから」（48.5%）が最も多く、これに「自己啓発や自らの成長につながると考えたため」（29.2%）が続いています（内閣府（2026）『2025年度市民の社会貢献に関する実態調査の結果について〈概要版〉』p.1）。「情けは人の為ならず」という言葉。「情け」という言葉をこの場合「人の為の行動」と読み替えていただきますと「人の為の行動は、その人の為だけでなく、最終的には自分にも良い結果として帰ってくる」という意味になると思われます。ピア・サポートの精神に基づくボランティア活動を通じた同心協力の学び合いが、当人自身を大きく成長させてくれる切っ掛けになることを願ってやみません。

常日頃よりボランティア活動に取組み、その振興にご尽力くださっている皆様に篤く御礼申し上げますとともに、今後も一層ボランティアセンターの活動にご支援を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

ボランティアセンターの理念・目的

学生生活支援の理念は、高い社会性・共同参画意識を有する、自立した社会人としての基礎力を有する人材を育成するために、正課外教育の観点から、課外活動を含めて充実したキャンパスライフを学生が送れるように、学生生活全般の充実とそのためのキャンパス環境の整備を図ることにある。この理念の下で、明治大学ボランティアセンターは、正課外教育の観点から、学生に対するボランティア活動の支援を全学的に推進することにより、学生の社会性及び自主性を涵養し、もって社会に有用な人材を育成することを目的としている。

ボランティアセンター運営委員会・分科会名簿

2025年度ボランティアセンター運営委員会

センター長	
経営学部 専任教授	石津　寿惠

副センター長	
駿河台担当 文学部 専任教授	冨重　与志生
和泉担当 法学部 専任教授	釜崎　太
生田担当 理工学部 専任教授	井上　全人
中野担当 政治経済学部 専任准教授	仮屋　浩子

運営委員			
法学部 専任教授	清水　宏	国際日本学部 専任准教授	小野　雅琴
商学部 専任講師	浅間　哲平	総合数理学部 専任准教授	三武　裕玄
政治経済学部 専任教授	後藤　光将	学生支援部長	鈴木　信泉
文学部 専任准教授	宮脇　梨奈	学生支援事務長	藤嶋　利生
理工学部 専任准教授	宮部　賢志	和泉学生支援事務長	東盛　達也
農学部 専任教授	川口　真以子	生田学生支援事務長	幕内　達二
経営学部 専任講師	浅野　千鶴	中野教育研究支援事務長	松尾　智己
情報コミュニケーション学部 専任准教授	清水　晶紀		

駿河台キャンパスボランティア活動支援分科会

座長（副センター長）	
文学部 専任教授	冨重　与志生

分科会委員	
法学部 専任教授	清水　宏
経営学部 専任講師	浅野　千鶴

事務局	
学生支援事務長	藤嶋　利生
学生支援事務室	長谷川佳代子
駿河台ボランティアセンター	松島　夏子

生田キャンパスボランティア活動支援分科会

座長（副センター長）	
理工学部 専任教授	井上　全人

分科会委員	
理工学部 専任准教授	宮部　賢志
農学部 専任教授	川口　真以子
生田キャンパス課	鈴木　幸司

事務局	
生田学生支援事務長	幕内　達二
生田学生支援事務室	江頭　洋介
生田学生支援事務室	大須賀　克之
生田ボランティアセンター	加藤　岳志
生田ボランティアセンター	内藤　惠介
生田ボランティアセンター	小林　優美子

和泉キャンパスボランティア活動支援分科会

座長（副センター長）	
法学部 専任教授	釜崎　太

分科会委員	
商学部 専任講師	浅間　哲平
政治経済学部 専任教授	後藤　光将
文学部 専任准教授	宮脇　梨奈
情報コミュニケーション学部 専任准教授	清水　晶紀
和泉キャンパス課長	庄井　正志

事務局	
和泉学生支援事務長	東盛　達也
和泉学生支援事務室	渡辺　正人
和泉ボランティアセンター	小林　和子
和泉ボランティアセンター	髙橋　真由美

中野キャンパスボランティア活動支援分科会

座長（副センター長）	
政治経済学部 専任准教授	仮屋　浩子

分科会委員	
国際日本学部 専任准教授	小野　雅琴
総合数理学部 専任准教授	三武　裕玄

事務局	
中野教育研究支援事務長	松尾　智己
中野教育研究支援事務室	西尾　忠久
中野教育研究支援事務室	菊池　稔子

目 次

活動報告書発刊にあたって
（ボランティアセンター長挨拶） 1

ボランティアセンター
運営委員会・分科会名簿 2

年間活動一覧 4

活動報告
副センター長より 6
センターが主催・コーディネートする活動 8
学生の自主的な活動の支援 38

資料
ボランティアセンター来室者・活動参加者 58
外部事業への協力・取材など
発行物

※表記について
明治大学では、「障害」の文字表記を「障がい」として統一しています。
ただし、固有名称および感想においては、この限りではありません。

2025年度 明治大学ボランティアセンター年間活動一覧

	駿河台ボランティアセンター	和泉ボランティアセンター
4月		・明大生ボランティア丸ごと紹介タイム P11 ・竹とんぼ教室 P26
5月	・災害救援ボランティア講座 P8 ・神田すずらん祭り（Tree） P55	・ごみ拾い活動 P35 ・哲学対話 P13
6月	・スポGOMI in すみだ環境フェア（Tree） P47 ・華を楽しむ会（Tree） P56	・海外ボランティア報告会 P12 ・杉並区高齢者との「Ocha-kai」（6月、12月、3月） P21 ・せたがや学生ボランティアネットワーク会議（6月～3月） P12 ・TABLE FOR TWO（ぱれっと）（6月、12月） P41 ・Meal for Refugees（MIFO）（6月、12月） P42 ・全商品リサイクル活動（MIFO）（6月、12月） P44
7月	・善福寺公園の清掃（Tree） P48 ・BLUE SANTA ごみ拾い（Tree） P49 ・ボランティア活動支援分科会	・夏のボランティア情報コーナー設置 P13 ・月見湯温泉探検隊 P25 ・ボランティア活動支援分科会
8月	・大学生と宿題を進める会（Tree） P46	
9月	・千代田区防災フェスタ（Tree） P56	
10月	・ホームカミングデーへの協力（Tree） P24	・せたがや学生ボランティアフォーラム P12 ・献血応援！学生コラボメニュー（学生赤十字奉仕団クローバー） P45
11月	・災害救援ボランティア講座 P8 ・総務課主催備蓄品配布訓練 P11 ・第14回NIPPON ITチャリティ駅伝（Tree） P40	・体験イベント「ブラインドウォーク・高齢者・点字・防災ポーチ」 P23
12月	・防災ワークショップ P10 ・善福寺公園の清掃（Tree） P48 ・石川県七尾市での災害ボランティア（しんちーむ） P38 ・スポGOMI環境省エコ・ファースト企業×大学生トークイベント（Tree） P54	・ボランティアサークル新幹事長・支部長顔合わせ P14
1月	・ボランティア活動支援分科会	・ボランティア活動支援分科会
2月		
3月		
通年	・エコキャップ回収（Tree） P52 ・エコキャップ業者引き渡し P53	・明大前駅周辺清掃活動（サークルぱれっと） P50 ・エコキャップ回収（サークルぱれっと） P54
4キャンパス合同	・3大学連携オンライン講座（10月・11月）	

生田ボランティアセンター	中野ボランティアセンター	
・ボランティア相談会 P17 ・昼休み学生トーーク！ P16 ・哲学対話カフェ P18		4月
・江の島新歓清掃（LINKs） P51 ・ランチ会（5月～6月） P17	・韓国語教室（5月～7月） P19 ・中国語教室（5月～7月） P20 ・献血活動への呼びかけ（学生赤十字奉仕団クローバー） P46	5月
・科学博士になろう① P27 ・ボランティア活動支援分科会 ・ボランティア相談会 P17		6月
・ボランティア活動支援分科会 ・哲学対話カフェ P18	・ボランティア活動支援分科会	7月
・かわさきサイエンスチャレンジ（7月～8月） P30 ・オープンキャンパス液体窒素実験 P31		8月
・小学校でのプログラミング授業のサポート（8月～9月） P33		9月
・明治まち燈の会（10月～1月） P19	・清掃活動（10月） P35 ・韓国語教室（10月～12月） P19 ・中国語教室（10月～12月） P20	10月
・生明祭液体窒素実験 P31 ・環境ワークショップへの出展 P36 ・科学博士になろう② P28		11月
		12月
・ボランティア相談会 P17 ・ボランティア活動支援分科会	・ボランティア活動支援分科会	1月
		2月
・石川県穴水町での被災地支援・交流活動（LINKs） P39		3月
・公式SNSでの発信 P15		通年

・ボランティアセンター運営委員会（年2回） ・オンライン団体登録（通年） ・災害復興ボランティア活動に対する助成金（通年）	4キャンパス合同

副センター長より

学生がみずから人間力を育む支援を

冨重 与志生　ボランティアセンター副センター長
（駿河台担当、文学部 教授）

2025年度の駿河台ボランティアセンターは、一昨年元旦に発生した能登半島沖地震の復興の遅れをはじめ、自然災害の頻発もあって高まっているボランティアへの関心に対応するために、春・秋各一回の災害救援ボランティア講座（各三日間）を開催しました。また、秋学期には、3大学連携協定を結んでいる関西大学の学生・職員にも参加いただいて、オンラインで“防災ワークショップ「12万棟も燃える東京の地震火災からどう命を守るか」”を実施しました。

学生ボランティア団体Treeのメンバーたちも、エコキャップ回収運動、練馬区春日町リサイクルセンター「環境月間イベント」参加、善福寺公園一斉清掃やBLUE SANTA海の日海浜清掃などの清掃活動、華を楽しむ会（猿楽町内の花壇の整備と花植え）などの主要な活動の他、神田すずらん祭り、千代田防災フェスタ、大学生と宿題を進める会、そして大学のホームカミングデー等々、数多くのイベントにも参加できました。

倒れた人があれば、頼まれなくても駆け寄って助けようとするのが人です。助け起こしたり、見守ったり、話を聞いたりします。しかしそれがうまくできるためには、とっさの行動力と体力が必要ですし、何より知識と共感力が必要です。これらを総合する力を人間力と言ったらよいでしょうか。この人間力のいくつかの側面を学生が身につけるのに、力添えをするのがボランティアセンターの役目だと思っております。そのような意味で、今後も学生の社会参加や社会貢献活動を支援するために、ボランティアセンターとしてさまざまな情報や機会を提供して参ります。それらを通じて学生がみずから人間力を育んでくれることを、私は大いに期待しております。

ボランティアを通じた地域体験と交流

釜崎 太　ボランティア副センター長
（和泉担当、法学部 専任教授）

本年度、和泉のボランティアセンターでは「団体やキャンパスの枠を超えて、活動に関わる学生同士が有機的につながるような雰囲気づくりや、機会を設けていく」ことを目標のひとつに掲げて活動しました。

和泉キャンパスは、世田谷区と杉並区をつなぐ位置にあり、多くの学生たちがボランティアを通じて両地域の住民の方々と交流するなかで、大学の講義やアルバイトとは異なる実体験にそくした学びの機会を得ています。今年度も災害支援、障がい者・高齢者体験、ごみ拾い活動など、ローカルな学びの機会を複数設けてきました。

その一方で、ボランティア活動は地域を超えた広がりをもちます。異なるサークルや団体間の交流によって駿河台や生田での体験を知ることはもちろんのこと、海外ボランティアの報告会はボランティア活動の視野をグローバルに広げる重要な機会ともなりました。

このようなボランティア活動報告会や交流会などによって、学生たち自らの体験だけではなく、他の学生たちの体験も踏まえてボランティアへの視野や関心を深めていくことができたように思います。来年度もまた、学生たちの充実した地域体験と交流活動がさらに活性化できるよう、新しい取り組みへのチャレンジも含めて、より充実した活動を目指したいと考えています。

科学と地域をつなぐボランティア活動

井上　全人　ボランティア副センター長
（生田担当、理工学部 教授）

大学生活は、専門知識を学ぶだけでなく、多様な人々や社会と関わりながら、自身の視野を広げていく大切な時間でもあります。ボランティア活動は、そのような学びを実践的に深める機会の一つであり、学生たちは活動を通じて多くの経験を積み重ねています。

2025年度の生田ボランティアセンターでは、理系学部の特色を生かした地域連携活動を継続して実施しました。近隣児童館で定期的に開催している「科学博士になろう」では、大学生ボランティアが少人数グループ形式でこどもたちと実験に取り組みました。また、川崎市最大規模の科学イベントである「かわさきサイエンスチャレンジ」では、「光のふしぎ～光のブーケをつくろう」をテーマに出展し、学生たちは事前準備や予行演習を重ねながら、こどもたちに科学の楽しさを伝えました。さらに、オープンキャンパスでの液体窒素実験など、多くの来場者に理工学の魅力を体験してもらう活動にも取り組みました。

こうした活動は、地域のこどもたちに新たな学びの機会を提供するだけでなく、学生自身にとっても、他者と協働しながら伝える力や主体性を育む貴重な経験となっています。今後も、多くの学生がボランティア活動を通じて成長できる環境づくりを進めるとともに、地域とのつながりを大切にした活動を継続していきたいと考えています。これまでご支援いただいた関係者の皆様、そして活動に参加した学生の皆さんに、心より感謝申し上げます。

中野駅周辺の再開発とともに活動の拡充を

仮屋 浩子　ボランティア副センター長
（中野担当、政治経済学部 准教授）

中野駅から徒歩5分、再開発地域「中野四季の都市（まち）」のなかに憩いの場「中野四季の森公園」があります。そこに隣接する中野キャンパスは、「国際化」「先端研究」「社会連携」をコンセプトとし、国際日本学部、総合数理学部の学生たちが学問・研究に勤しむかたわら、住民や企業組織人など様々な人々が集い交流する場としての土地柄を生かした、ボランティア活動が行われています。好評をえているのは、講師が学生ボランティアとなり例年実施されている中国語・韓国語の語学教室、地域住民の方々や学生同士の新たな交流をうむ機会となっている清掃活動などです。語学教室では様々なアクティビティを通じて学習者の動機づけとなるような工夫がされていて、さらには異文化交流の場にもなっています。清掃活動には、他キャンパスからの参加もあり、貴重な交流機会となりました。また、学生の自主的な活動として献血活動が実施され、地域社会への貢献意識の高さが伺えました。

中野駅周辺は近年、歩行者に優しい空間の確保はもちろんのこと、より国際性や、先端性、社会連携が期待されるようなエリアへの変貌を目指して、さらなる再開発がすすめられています。区役所の新庁舎への移転、そして商業施設やマンションの開発に呼応するように、今後も行政や地域と連携した活動の一層の拡充を図り、学生の成長に寄与するとともに社会からの要請に応えていく所存です。皆様のご理解、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

センターが主催・コーディネートする活動

防災・復興

災害救援ボランティア講座 駿河台

千代田区大規模災害時における協力体制に関する基本協定に基づき、2005年度から実施している千代田区助成事業です。千代田区と大学の災害時の協力体制を確実なものとしていくための学生ボランティアの養成を目的として実施しています。全3日間のカリキュラム修了者には、「セーフティリーダー認定証」および「上級救命技能認定証」が交付されます。

日　時　春学期　2025年5月31日（土）、6月7日（土）、14日（土）　9：00～17：00
秋学期　2025年11月8日（土）、15日（土）、22日（土）　9：00～17：00

場　所　駿河台キャンパスリバティタワー内教室およびスポーツルーム、グローバルフロント、池袋防災館

内　容　消防実務・ボランティア有識者による講義・演習、防災館での災害模擬体験、上級救命技能講習などの実技を3日間通して学ぶ。

協　力　災害救援ボランティア推進委員会

後　援　総務省消防庁、NHK

受講者数　春学期 37名　秋学期 22名

累計受講者数　1012名（2005～2025年度）

災害救援サポーター登録人数　春学期・秋学期累計 54名

？ 災害救援サポーターとは…

災害発生時に、本学教職員と協力して積極的に支援活動に参加する明治大学生の組織。
例えば、避難誘導、備蓄品配布の手伝い、負傷者の手当てや搬送等を想定しています。その他、防災関連イベント等の協力も想定している。登録時から在学期間中適用となる。

【過去の災害救援班（サポーター）の取り組み】
・駿河台キャンパス総合防災訓練への参加　・AED講習会の実施など



・地震・火事などジャンルごとに詳しく講義を受けることができ、内容を整理して理解することができた。グループワークや図上演習も非常に有意義だった。
・救援方法や災害に関する知識を知ることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。



防災館の様子



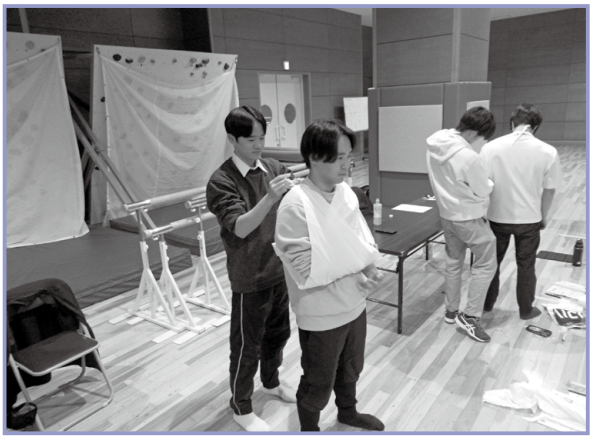
救命講習の様子



グループワークの様子



講義の様子



救命講習の様子

防災ワークショップ 駿河台

2014年度から駿河台キャンパスで実施している企画で、学生や教職員の防災意識を高めることを目的に年１回開催しています。今回は、在学時間に直下地震が発生したとして、どう対応し、みんなの命を守っていくかを考え、具体的にシミュレーションしながらワークショップを通して意見交換を行いました。

３大学連携協定を結んでいる関西大学の学生、教職員にも参加していただき様々な視点で防災について考えました。

日　時	2025年12月17日（水）　5限（17：10～18：55）
方　法	Zoom
目　的	・学生、教職員に対する防災意識の向上 ・災害時の学生ボランティア養成のためのきっかけづくり
内　容	・講義 ・グループワーク ・質疑応答
参　加	明治大学（学生５名、教員１名）、関西大学（学生３名、職員１名）
講　師	中林一樹 氏（明治大学 元特任教授、明治大学 復興・危機管理研究所客員研究員（研究・知財戦略機構研究推進員）、東京都立大学 名誉教授、首都大学東京 名誉教授）



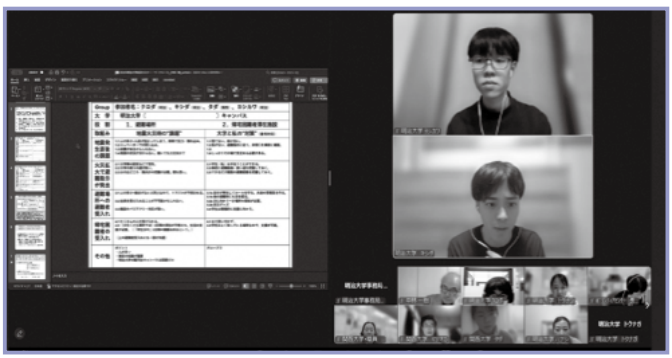
・講話もグループワークも大変勉強になりました。グループの皆さんが自分ができそうな対策をたくさんあげていらっしゃったのが、印象的でした。また、このようなセッションがあれば参加したいです。

・本日は貴重な講義をありがとうございました。地震や火災発生時の状況をいざ考えてみると、普段考えないリスクがたくさん出てきました。これをきっかけにもしもの時の備えについて、頭の片隅に置いておきたいと思いました。

・講話とグループワークと、盛り沢山で非常に勉強になりました。私は昨年度に学部のゼミで、中林先生の1992年の論文も参考に、徒歩帰宅を実践してみた経験があります。その時に多くの情報を調べたのですが、今回のお話で新たな気づき・アップデートされていた情報を得ることができ、とても貴重な機会になりました。誠にありがとうございます。このような機会が、今後も開かれると嬉しいです。

・地震やそれに伴う火災が、大学にいるときに発生した際の課題を、考えたことはありませんでしたが、大学内での避難状況や火災発生時に予想される周辺状況についてイメージする事ができました。大学で被災から自宅帰宅までどのような道のりになるのか、帰宅ルートなど調べてみようと思いました。

・今回の防災ワークショップを機に、自分の住んでいる自治体や通っている大学周辺の情報を集めて、火災発生時の対応を考えていこうと思います。本日は本当にありがとうございました。



防災ワークショップの様子

備蓄品の配布訓練 駿河台

明治大学総務課主催により、駿河台キャンパス備蓄品の配布訓練が行われ、ボランティア学生が協力しました。当日は段ボールを開け、備蓄品（クラッカー、アルファ化米、2Lミネラルウォーター）をテーブルに並べたり、空になった段ボールを畳んで重ねたりする作業に協力しました。

日　時	2025年11月12日（水） 12：30～13：30（ボランティア学生は、実施時間内で空いている任意の時間に参加）
場　所	リバティタワー1階紫紺ホール
内　容	備蓄食料品配布訓練の補助
参　加	4名
目　的	今後発生が予想される大規模災害に備え、防火・防災に対する意識及び技術の向上を図る。
センターの役割	連絡・調整、ボランティア募集、当日受付





備蓄品運搬・配布の様子

情報提供・交流

明大生ボランティア丸ごと紹介タイム 和泉

昼休みの時間帯を利用し、明大生が取り組むさまざまなボランティア活動を紹介する企画を実施しました。

活動分野や団体の形態を問わず取り組んでいる多様なボランティア活動を、各団体が順番に紹介し、来場した学生は関心のあるテーマや活動内容を比較しながら話を聞くことができました。

終了後は、興味を持った団体の担当学生に個別に相談する姿も多く見られ、短時間ではありましたが、参加者が新しい活動と出会うきっかけとなる有意義な機会となりました。

日　時	①2025年4月21日（月）　昼休み ②2025年4月23日（水）　昼休み ③2025年4月24日（木）　昼休み
場　所	和泉キャンパス内教室
参　加	①58名（登壇者8名含む） ②33名（登壇者6名含む） ③23名（登壇者7名含む）



熱心に耳を傾ける学生達



登壇した学生達

海外ボランティア報告会 和泉

海外ボランティアに関心を持つ学生に向け、実際に海外で活動した学生から体験や学びを共有してもらい、新たな挑戦へのきっかけを提供することを目的として実施しました。また、海外ボランティアに参加する際の注意点や心構えについて、NGO法人NICEの協力を得てレクチャーを行いました。

終了後に複数の学生が残り熱心に質問や相談を行う姿が見られ、海外ボランティアへの高い関心がうかがえました。



報告会の様子

日　時	2025年6月12日（木）　昼休み
場　所	和泉キャンパス内教室
参　加	10名（報告者3名）
協　力	NGO法人NICE1名

せたがや学生ボランティアネットワーク会議・せたがや学生ボランティアフォーラム 和泉

「せたがや学生ボランティアネットワーク会議」は、世田谷区内で活動する各大学の学生ボランティア団体と区が連携し、大学生の地域でのボランティア活動を推進するために、年間を通して開催されています。大学生が地域や区とつながり、活躍できる機会を広げることで、新たなまちづくりに繋げていくことを目的としています。

この取り組みの一環として、区内で活動する大学生が日頃のボランティア活動を発表し、地域の方々と交流するイベント「せたがや学生ボランティアフォーラム」が実施されています。学生と区が協力して“まちづくり”を進めるきっかけをつくるとともに、大学生によるボランティア活動への区民の理解や関心を深めることを目指しています。

2025年度は、本学から公認ボランティアサークル5団体がこのフォーラムに参加しました。

日　時	せたがや学生ボランティアネットワーク会議　2025年6月～2026年3月（年5回開催） せたがや学生ボランティアフォーラム　2025年10月4日（土）　13：30～15：15
場　所	世田谷区立北沢区民会館「北沢タウンホール」
参　加	公認ボランティアサークル「心身障害者福祉会 しいの実」 公認ボランティアサークル「のえる」 公認ボランティアサークル「ぱれっと」 公認ボランティアサークル「Relief」 公認ボランティアサークル「SHIP」
内　容	せたがや学生ボランティアフォーラム2025 ①活動紹介：各学生ボランティア団体がマイクリレー形式で紹介 ②ポスターセッション：学生ボランティア団体と地域の方々との交流 ③トークセッション：学生ボランティア団体と地域で活動する団体との対話 「テーマ」①世田谷×学生×子ども ②世田谷×学生×環境・防災 ③世田谷×学生×まちづくり

夏のボランティア情報コーナー設置 和泉

学生が夏季休暇中に参加できるボランティア活動を案内するため、ボランティアセンター内に特設の情報コーナーを設置し、活動の相談や質問に応じました。また、ボランティアに参加する際の注意点の説明や、安心して活動できるようボランティア保険への加入案内もあわせて行いました。

日　時	2025年7月1日（月）～9月19日（金）
場　所	和泉ボランティアセンター
参　加	25名

哲学対話 和泉

本企画は、さまざまなバックグラウンドを持つ学生に向けて、哲学対話の手法を用いながら、気軽な雰囲気の中で誰もが対等に意見を交わす場を提供することを目的として開催しました。参加者は、日頃学んでいることや関心のあるテーマをもとに自由に考え、語り合うことで、多様な視点に触れる機会となりました。

日　時	2025年5月30日（金）　15：30～17：00
場　所	和泉キャンパス内教室
内　容	テーマ「怖さ」って何だろう？ 哲学対話では、答えをひとつに絞らず、否定しないことを基本ルールとして場を整えた。参加学生は「大学が怖い」「バイトが怖い」「サークルが怖い」など自身の感じる「怖さ」を言葉にして共有し、互いの状況や思いを理解し合う機会となった。
参　加	12名（ファシリテーター3名含む）



哲学対話の様子

ボランティアサークル新幹事長・支部長顔合わせ 和泉

学生のつながりの場所でもあるボランティアセンターで、サークル幹部の代替わりの時期に合わせ、サークル同士の交流を深めることを目的として実施しました。和泉ボランティアセンターでは、サークル活動の活性化や横断的な取り組みの広がりを期待し、今後も定期的な会合を支援していきます。

今回は公認ボランティアサークルMIFOが取り組む「全商品リサイクル」活動を通じて連携している（株）ユニクロの方を講師にお招きし、サステナビリティに関する講演を実施しました。MIFO・ユニクロ・和泉ボランティアセンターの共同企画として開催され、サークル間の理解と連携が深まる機会となりました。

日　時　2025年12月2日（火）　17：10～20：00
場　所　和泉キャンパス内教室
内　容　【第一部】
17：15～17：50　ユニクロによるサステナブル講演
17：50～18：30　質疑応答
18：30～18：40　休憩
【第二部】
18：50～20：00　公認ボランティアサークル8団体による活動紹介、運営方法
年間計画などの発表
参　加　24名（公認ボランティアサークルの新幹事長・支部長）
協　力　株式会社ユニクロ2名


司会の様子


サステナブル講演

公式SNSでの発信 生田

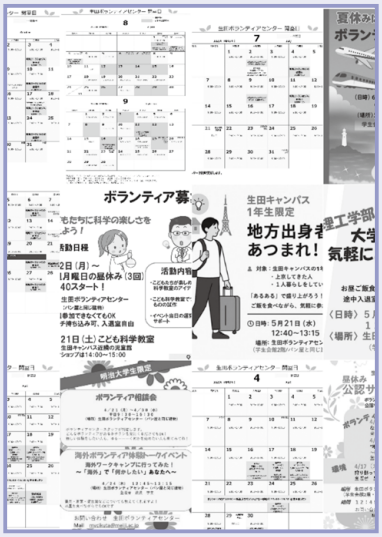
①公式Instagramの活用

2025年度も公式Instagramを活用して、生田のボランティアと社会貢献の“今”について、より一層積極的な発信に努めました。

日　時　2025年4月1日（火）
～2026年3月31日（火）

内　容　公式Instagramをとおして生田のボランティアと社会貢献の“今”を発信する
(1) 開室カレンダーの公開
生田ボランティアセンターの開室情報を、カレンダー形式でこまめに更新した
(2) センター主催イベントの告知
イベントポスターを掲載し、主催イベントを広報した

発　信　23回　体験談を寄稿した学生10名
（開室カレンダー公開13、イベント告知その他10）



公式 Instagram

②LINE 公式アカウントの活用

2023年度より外部団体のボランティア情報をLINE公式アカウントを使って発信しています。年度が替わるごとに新しいアカウントに更新します。

日　時　2025年4月1日（火）～2026年3月31日（火）

内　容　(1) 送信対象者…生田ボランティアセンターにボランティア相談に来室した学生のうちの希望者
(2) 発信する情報…生田ボランティアセンターで公開しているボランティアで、長期休みでのボランティア及び募集期間が短いもの。

発　信　15回

登　録　2025年3月31日現在　30名

昼やすみ学生トーーク！ 生田

大学には、様々なことを学び、活動し、考えたり、試している学生がたくさんいます。そのような学生達によるプレゼンや交流のイベントを、2016年度から、授業期間中の昼休みに開催しています。

2025年度も、【学生トーーク！】を開催しました。

ボランティア活動を通じて感じたこと、考えたことを伝えました。

日　時 2025年4月16日（水）～2025年4月24日（木）
授業期間の昼休み　12：45～13：15　計4回

場　所 生田ボランティアセンター

方　法 対面

参　加 学生85名（担当含む）

日時	タイトル	担当	方法	参加
4月16日（水）	LINKs Links～なかよくボランティアしませんか！	生命科学科 てんま 食料環境政策学科 しゅうま	対面	26
4月17日（木）	狩り部 狩り部ってなに？野生動物管理と社会貢献	農学科 天沼朝陽	対面	37
4月18日（金）	しんちーむ “地域とつながる”ってこういうこと！ ～福島・こども・高齢者を支える現場から～	法学部3年 鬼澤宏樹、箭内結衣 情報コミュニケーション学部 伊東柚衣	対面	4
4月24日（木）	海外ワークキャンプに行ってみた！ ～「海外」で「何かしたい」あなたへ～	農学部3年　3名	対面	9





プロジェクタでスライドを投影しながらトーク

ランチ会 生田

2023年度からはじめたランチ会は、ボランティアセンターを知ってもらうことや、来室者同士の交流の機会をつくり、仲間づくりの促進を図ることを目的としています。学生同士が気軽に対話できるようにするため、ボランティアセンターの職員は原則として成り行きを見守っています。

生田ボランティアセンターでは、新入生を対象とした「地方人あつまれ！」や来室した学生の質問や疑問に答える「大学院生と気軽におしゃべり」など様々な切り口で、学生の来室動機につながるような試みをしています。

日　時 ①2025年5月19日（月）
②2025年5月21日（水）
③2025年6月30日（月）
場　所 生田ボランティアセンター
参　加 14名

日時	タイトル	参加
①5月19日（月）	大学院生と気軽におしゃべり	5
②5月21日（水）	地方人あつまれ！	7
③6月30日（月）	大学院生と気軽におしゃべり	2

ボランティア相談会 生田

ボランティアセンターへの来室の動機付けとなるよう、学期はじめを中心に相談会を開きました。

ボランティアセンターでは常時開室して学生のボランティアに関する相談にのっており、そのことを伝えるために、一定期間を相談会としました。具体的なボランティア例を記載して学内ネットで周知すると、はじめて来室する学生、なんとなくボランティアをしてみたいが、どんなボランティアがあるのかわからないので知りたい、という学生が、とくに4月の相談会に多く来室しました。

日　時 ①4月21日（月）～4月30日（水）の平日
②6月16日（月）～6月20日（金）の平日
③1月13日（火）～1月30日（金）の平日
場　所 生田ボランティアセンター
内　容 学生のニーズを聴き、ボランティア情報を案内する。
参　加 ①24名　②19名　③5名

哲学対話カフェ 生田

2023年4月までは生田ボランティアセンターでも実施していた対話カフェを2年ぶりに実施しました。

哲学対話とは、さまざまな学生が専門や学年を超えて対話し、哲学的な問いから身近なテーマまで、ともに考えを深めていくものです。ボランティアセンター職員は対話の成り行きを見守りました。

ルールは
・伝わりやすい言葉で話す
・人の話を遮らない
・否定的な態度を取らない

日　時　①2025年4月25日（金）　15：20～17：00
②2025年7月2日（水）　18：10～19：50

場　所　生田ボランティアセンター

内　容　①テーマ「『恋』とはなにか」
『恋』とどのように向き合うかを考える。
②テーマ『心地よいコミュニケーションとは何か？』
あなたにとって、心地よいコミュニケーションとは何か。
その心地よさは、なぜ・どうやって生まれるのか。
そして、心地よさは、必ずしも善いものといえるのかを考える。

参　加　①8名（ファシリテーターの学生含む）
②4名（ファシリテーターの学生含む）



文学部3年　平田 里颯

私は大学1年生の頃から哲学対話の活動を企画・運営しており、現在は大学内外を問わず、さまざまな場所で対話の場を開いています。今回、初めて生田キャンパスで開催することができ、新たな挑戦となりました。　テーマは「恋とは何か」。「恋」という言葉は日常にあふれていながら、家族や友人とはどこか恥ずかしくて話しづらい、しかし多くの人が心の中で悩みを抱えているテーマだと感じています。そこで、現象学の手法を取り入れながら、自分の「恋」に関する本音や違和感を安心して語り合える場を目指して企画しました。

当日はほとんど哲学対話が初めてというメンバーが集まりましたが、皆が楽しそうに、普段は口にしにくいような疑問を語ってくれました。

たとえば、
・恋は人間にしか起きないのか？
・恋と愛と性欲の違いは何か？
・恋は本当に存在するのか？誰にでもできるものなのか？
・なぜ恋をすると相手を理想化してしまうのか？
・不倫はなぜ起こるのか？そしてなぜ「いけない」とされるのか？

といった問いが自然に生まれ、参加者の考えや経験によって対話はどんどん深まっていきました。

「何を話してもいい」「何も話さなくてもいい」「話している


対話の様子

途中で分からなくなってもいい」という哲学対話のルールが、今回も良い効果を発揮していたと感じています。私自身もファシリテーターとして進行しながら、「さっき言っていたことと矛盾しているかもしれない」と気づかされたり、参加者から指摘を受けました。

哲学対話とは、偶然集まった人たちが一つの問いについて語り合い、当たり前だと思っていた自分の考えが揺らぎ、他者との違いに気づかされる営みです。

私たちが生きる社会には、分からないことの方が圧倒的に多く存在します。

分からないという状態や、それを口に出すことは、ときに怖さや孤独感、不安につながることもあります。しかし、分からないことを無理に単純化して理解したつもりになったり、見て見ぬふりをしてしまったりすることは、知らず知らずのうちに差別や間接的な加害になり得ます。だからこそ、分からないことをそのまま共有し、他者との対話を通じて、自分の価値観に気づき、社会を知っていく。この哲学対話の営みを広めていきたい。そして、わからないことを考え続けることの楽しさや奥深さを、これからも多くの人に伝えていきたいと考えています。

明治まち燈の会 生田

2025年10月より、生田の商店街や町内会など地域とのつながりを大切にした活動を行いたいという思いから、地域に寄り添った活動を目的とするボランティアサークル、明治まち燈（あかり）の会が発足しました。発足以降は、ボランティアセンターにおいてボランティア活動に関する相談やミーティングを重ねながら、活動内容の検討や運営体制の整備を進めてきました。

今後は、地域との連携を深めながら、学生主体による自主的な活動の展開が期待されます。

日　時	2025年10月14日（火）～2026年1月27日（火）　全17回
場　所	生田ボランティアセンター
方　法	対面
内　容	・発足メンバーを中心としたミーティングの実施 ・ボランティア保険に関する相談対応 ・活動内容・運営に関する相談支援
参　加	50名

語　学

韓国語教室 中野

中野キャンパスでは、明大生が明大生に韓国語や韓国文化を教えながら異文化交流を行う教室を毎年開催しています。

日　時	5月12日（月）～7月7日（月） 10月27日（月）～12月8日（月）
場　所	中野キャンパス
内　容	明大生が明大生に語学や文化を教える活動
参　加	学生149名

日時	回数	講師学生	受講学生
5月12日（月）～7月7日（月）13：30～15：10	7回	20名	41名
5月14日（水）～7月9日（水）13：30～15：10	7回	19名	22名
10月27日（月）～12月8日（月）13：40～14：40	6回	16名	31名



・日本に来る前から韓国語を教えてみたい！という考えがあったので募集のお知らせを見て応募しました。韓国に興味も持っている方々が参加するので話もよく通じるし、クラスの雰囲気がとてもいいです。
・もっと韓国のことを知ってもらいたい！
自分と違う文化の人と触れ合う機会を作ってあげたかったです！

中国語教室 中野

中野キャンパスでは、明大生が明大生に中国語や中国文化を教えながら異文化交流を行う教室を毎年開催しています。

日時　5月15日（木）～6月26日（木）
10月10日（金）～12月5日（金）
場所　中野キャンパス
内容　明大生が明大生に語学や文化を教える活動
参加　学生93名

日時	回数	講師学生	受講学生
5月15日（木）～6月26日（木）12：40-13：20	7回	14名	34名
10月10日（金）～12月5日（金）12：40-13：25	7回	14名	31名



・私は小学生の頃から散文や古詩などの中国文学が大好きで、国語（中国語）はずっと好きな教科の一つでした。また、高校時代には小学生向けの英語の支援教育（ボランティア活動）を行っていたため、教えることに関するボランティア活動にも慣れています。今回の機会を通して、より多くの人に中国語を学んでもらいたいと思っています。もし可能であれば、中国文学も一緒に学びながら、中国語の魅力を皆さんに感じてほしいです。
・異なるバックランドのクラスメイトたちと交流することができて、私自身も講師としてたくさんのことを学びました。講師をやろうと思ったきっかけは日本語で中国語の授業を行うのが自分にとって挑戦な機会だ思ったことです。

杉並区高齢者との「Ocha-kai」 和泉

和泉ボランティアセンターでは、地域包括支援センター「ケア24永福」と連携し、近隣地域にお住まいの方々と互いに交流を深め、安心して生活できる地域づくりを目指した「Ocha-kai」を定期的に実施しています。学生達が交流企画の検討・運営を担い、ボランティアセンターでサポートをしています。

10年以上継続して開催しているこの交流会を、地域の方々とのつながりを途切れさせることなく維持・発展させていけるよう、今後も取り組んでまいります。

〈第1回〉

日　時	2025年6月14日（土）　14：00～16：00
場　所	和泉キャンパス和泉の杜（学生食堂）
内　容	手作りゲーム（みんなで風船送り、絵しりとり、的当てゲーム）、工作（花紙で作るアジサイ）
参　加	学生9名、地域の方14名、ケア24永福職員3名



絵しりとりゲームの様子



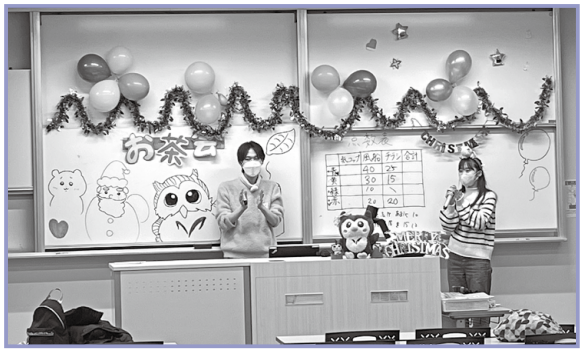
地域の方と歓談

〈第2回〉

日　時	2025年12月6日（土）　13：30～15：30
場　所	和泉キャンパス内教室
内　容	手作りゲームでクリスマス、歓談
参　加	学生9名、地域の方10名、ケア24永福職員3名



ボール送りゲームの様子



司会の学生

〈第３回〉

日　時　2026年3月28日（土）　13：30～15：30
場　所　和泉キャンパス和泉の杜（学生食堂）
内　容　手作りゲーム（あたまおしりゲーム、玉つかみゲーム、ちぎり絵パズル、玉のせゲーム）、歓談、キャンパス内お花見
参　加　学生６名、地域の方10名、ケア24永福職員２名



ゲームの様子


集合写真



政治経済学部２年　津賀 美里

私は２年生からお茶会に参加しています。最初は「高齢者の方々と交流してみたい」という漠然とした気持ちで参加しましたが、活動を通して多くの経験をしたことで、私自身大きく成長できたと感じます。

お茶会では、ただレクリエーションの内容を考えるだけでなく、高齢者の方々が抱える不安に配慮しつつ、高齢者・学生ともに楽しめる企画を考える必要があります。そのため、難しさもありますが、メンバー同士で話し合うだけでなく、実際に自分たちでレクを試しながら改善を重ねることで、より良いアイディアを企画に反映できていると感じます。この経験を通して、様々な立場の人の視点に立ち、広い視野を持って企画・運営する力を身につけることができました。

また、私たちが考えたレクを高齢者の方々が楽しんでくださっている様子を見ると、大きなやりがいを感じます。実際に多くの高齢者の方々と対話をする中で、さまざまなことを学び、知見を広げられることも、お茶会の大きな魅力だと思います。

これからも、お茶会が学生と高齢者の方々にとって大切な居場所となるよう、積極的に活動に参加していきたいです。

政治経済学部２年　岩﨑 まどか

私は、友人に誘われたことがきっかけでお茶会に入り、約１年活動に携わってきました。

最初はゆるくボランティアができたらという気持ちでしたが、今ではお茶会が私の大学生活に欠かせないコミュニティになっています。私が感じるお茶会の一番の自慢は、圧倒的なメンバーのあたたかさです。お茶会には、入った瞬間から自分の居場所であると感じられるような安心感があります。そしてお茶会は、自分に自信をつけるための挑戦の場にも相応しいと感じています。当日のレクや段取りは全て学生が考えるため、お茶会では何度も話し合いをします。私は意見を出すのが得意ではありませんが、お茶会の話し合いでは周りが自分の考えをしっかり受け止めてくれるため、躊躇せずに発言することができています。さらに、当日の司会進行を担当することで普段は苦手な人前で臨機応変に話す経験が増え、成長に繋がっていると感じています。当日起こり得るトラブルやリスクを想定しながら、どうすれば楽しさも安全性も運営の楽さも同時に叶えられるかをメンバーで議論している時間はとても充実感があります。

また、普段関わる機会の少ない高齢者の方々と実際に交流してみると、私たちが想像していなかった場面で盛り上がったり、逆に上手くルールが伝えられなかったりなど、毎回新たな発見が多く、それが私達にとって良い刺激になっています。そして、高齢者の方々に喜んでもらい、感謝の言葉をいただいた時はとてもやりがいを感じます。

私は、新しくお茶会に入ってくれる学生にもこのような刺激と成長のある経験や、あたたかい雰囲気を感じてもらえるようにこれからも活動をしていきたいです。

体験イベント「ブラインドウォーク・高齢者・点字・防災ポーチ」和泉

和泉ボランティアセンターでは、学生がより気軽にセンターへ足を運べるよう、センター内で体験イベントを実施しました。 ブラインドウォークや高齢者疑似体験、点字体験などを用意し、学生は模擬体験装具を着けて数メートル歩くだけで、高齢者が日常で感じる負担や不安を実感していました。その結果、「手助けの必要性を強く感じた」という声も多く寄せられました。

また、今回は災害への意識を高めることを目的に企画の有志学生を募り「防災ポーチ作成コーナー」を設置し、イベントと連動して実施しました。完成した防災ポーチをSNSで共有するなど情報発信も学生主体で行い、単発のイベントに留まらず学生同士が継続的に学び合い企画を更新し続けるコミュニティへと発展しています。

体験後に、体験を通して家族支援のあり方や社会的介護について考えるきっかけになればと、アンケートも実施しました。

日　時	2025年11月11日（火）～14日（金）、17日（月）　10：00～16：30
場　所	和泉ボランティアセンター
内　容	①高齢者模擬体験セットを装着し荷物を持って歩行 ②白杖及びアイマスクを着用し歩行または手引きを行う ③点字器で名刺などを作成 ④防災ポーチ作成（明大生有志企画）
参　加	34名



アンケート（Googleフォーム回答）

- 高齢者疑似体験をしたことで、高齢者の気持ちや大変さをより深く理解できた。これからは、今まで以上に思いやりを持って接していこうと思う。
- 重りやゴーグルなどをつけてみて一歩一歩を踏み出すのも大変でした。特に腰を曲げるためのバンドをつけると、ずっと腰を曲げたままで、体の痛みや腰の痛みを感じました。実際に体験してみないと高齢者の方や目の不自由な方のことや生活を理解することができないと強く感じました。
- 普段の感覚とは全く異なっていて、気づきがたくさんあった。
- 校内にある点字ブロックの上を歩いて凹凸を感じてみて、点字ブロックの上を塞がないようにしようと思いました。


高齢者疑似体験


ブラインドウォーク体験


防災ポーチ作成体験

ホームカミングデーへの協力 駿河台

ホームカミングデーは、本学のステークホルダーである校友を主な対象として、母校愛の醸成、校友同士の親睦強化、大学の近況（母校の取り組み）の周知、寄付の促進等を目的として実施されています。駿河台ボランティアセンター直属学生ボランティア団体Treeは、ホームカミングデーに毎年協力し、来場者が楽しめる企画を行っています。

日　時	2025年10月26日（日）　10：00～16：00
場　所	駿河台キャンパスグローバルフロント1階
内　容	輪投げ・射的・ペットボトルボーリング・ビンゴの4つのブースを設け、子どもが楽しめる縁日のブースの出展を行った。
参　加	40名（駿河台ボランティアセンター直属学生ランティア団体Tree）



文学部4年　舟木 瑠渚

今年度は、輪投げ・射的・ペットボトルボウリング・ビンゴの4つのブースを設けました。11時の開始とともに多くのお客様がお越しくださり、ビンゴ大会の会場は満席となり、各ブースにも列ができるなど大変な賑わいとなりました。ご家族で楽しそうに過ごされる姿や、子ども達の笑顔をたくさん見ることができ、「絆を深める」というホームカミングデーの目的に少しでも寄与できたことを嬉しく思っております。 また、今回の取り組みを通して、私達団員同士も協力し合い、より強い絆を築くことができたと感じております。準備日や当日の設営・運営・片付けの場面では、臨機応変な対応が求められましたが、互いを支え合いながら落ち着いて取り組むことができました。特に、当日は準備時間が限られる中で、全体をまとめてくれた関が指揮を執ってくれたおかげで、安心して活動を進めることができました。このような貴重な機会を設けてくださったボランティアセンターのみなさま、校友連携事務室のみなさまに、心より感謝申し上げます。



ホームカミングデーの様子

月見湯温泉探検隊 和泉

公認ボランティアサークル「Relief」は、銭湯文化の魅力を伝えるサークル活動の一環として、小学校が主催する夏休みイベントに「銭湯体験」を企画・実施しました。和泉ボランティアセンターは、小学校や月見湯温泉との連携、広報活動のサポート等を行いました。参加した児童10名は、普段は見ることのできない銭湯の裏側を見学し、興味津々の様子で学びと体験が効果的に結びつき、有意義なイベントとなりました。

日　時	2025年7月31日（木）　13：30～15：00
場　所	月見湯温泉
参　加	12名（公認ボランティアサークルRelief）
内　容	①銭湯内の掃除体験 ②銭湯マナーをクイズ形式で学習 ③銭湯見学ツアー（ボイラー室、浴場設備） ④銭湯用マイかご作り
主　催	世田谷区立松沢小学校
協　力	月見湯温泉



経営学部3年　楠田 有里

活動内容を三部構成で企画し、開催日の猛暑も予想されていたため、準備段階から段取りに苦戦しました。しかし、当日の動線や役割分担を細分化し、事前リハーサルを念入りに行ったことで、無事に開催することができました。何より、参加したメンバーが自分の役割をしっかりと果たし、小学生とのコミュニケーションも積極的に取っていたことで、子ども達が安心して参加できる場を作れたと感じています。

またイラストが得意なメンバーが中心になり、銭湯に行くときに使用してもらえればと「マイかご作り」の材料を用意しました。参加者が自分用にかごにペイントをして手作りのチャームをつけるなどが大好評で、銭湯体験をより楽しく感じてもらうことにつながりました。さらに、参加者アンケートでは、銭湯に行ったことのない児童が「また月見湯に来たい」と答えてくれました。このイベントが銭湯への関心の増大につながったことを、とても嬉しく感じました。

銭湯が「人とのつながりを守る場所」という側面に惹かれていた私にとって、今回、サークルメンバーや多くの方々と協力してイベントを開催できたことは、一生忘れられない思い出となりました。 これからも銭湯の魅力を発信しながら、地域や社会に貢献できる企画づくりを目指していきます。





イベントの様子

竹とんぼ教室 和泉

子ども達に竹とんぼ作りと遊び方を伝える団体「どこ竹@竹とんぼ教室」が、杉並区内の公園、児童館やお祭りなどで開催する教室に、学生が先生役のボランティアとして参加しています。事前に作り方や注意事項を学ぶための講座を受講し、子ども達との交流を通し、外で遊ぶことや物づくりの楽しさを伝える活動を行っています。

日　時　2025年4月29日（火）～2026年3月21日（土）
参　加　56名
連　携　どこ竹@竹とんぼ教室

〈竹とんぼづくり教室〉

日時	会場	参加
2025年4月29日（火）	海の森公園	2名
2025年7月9日（水）	杉並第六小学校	4名
2025年7月24日（木）	杉並区環境活動推進センター	2名
2025年9月11日（木）	下高井戸子供園	9名
2025年10月15日（水）	上高井戸子供園	3名
2025年10月19日（日）	杉並区環境活動推進センター	7名
2025年11月8日（土）	向陽スポーツ文化クラブ（西永福）	4名
2025年11月22日（土）	海の森公園	3名
2025年11月24日（月）	杉並区立柏の宮公園	1名
2026年3月8日（日）	すぎなみサイエンスフェスタ、イマジナス（高円寺）	10名
2026年3月20日（金）	海の森公園	8名
2026年3月21日（土）	海の森公園	3名

科学博士になろう1 生田

キャンパス近隣の児童館で開催している恒例の科学教室プログラムです。企画の学生は月曜日の昼休みにボランティアセンターに集まって試作しました。当日運営は、4キャンパスの学生を対象に募集したため、他のキャンパスからも学生が参加しました。

日時	A：企　　画　2025年6月2日（月）～6月16日（月）　昼休み B：リハーサル　2025年6月21日（土）　10：00～ C：教室運営　2025年6月21日（土）　13：00～
場所	A、B：生田ボランティアセンター C：三田こども文化センター
内容	小学生むけ科学教室の開催
参加	14名（A：14名　B、C：7名）
体験	小学生21名（保護者8名）
方式	未就学児から小学6年生2～4人に1名の明大生が寄り添うグループ方式
テーマ	『うく？しずむ？水の中で動くおもちゃをつくろう』 水の入ったペットボトル、魚のタレビン、ナット等で浮沈子を作成。



- ビーズとか貝殻がきれいに入れられたのが楽しかった。魚がきれいにできたのがうれしかった。キャップがきれいにできたのが楽しかった。中とか前とかきれいにできたのが楽しかった。
- 作るのが楽しかった。
- 貝殻が浮いたのでおもしろかったです。デコったりするのもとてもおもしろかったです。 はやく親にみせたいです。
- ペットボトルにいろんなものをいれるのが楽しかった。
- どうやったらきれいになるか、どうやったら魚が沈むか考えて、疲れたけど楽しかった です。次は「手につかないスライム」を作ってほしいです。



- 子どもに「なぜそうなるのか？」や「自分の考えのアウトプット」の場になってよかった
- 近くにいる大学生の方々に教えてもらう機会となってよかったです。学校とは違った人に 教わり、水の中を浮いたり沈んだりする不思議な玩具を自分で作る事が面白かったと思い ます。
- 知育として実験していく過程を子どもからみるとどうなっていくのかワクワクしている 表情が見れて親としては嬉しかったし親子で楽しめました。たくさんの素材を準備して いただきありがとうございました。お姉さん、お兄さんの司会進行もおもしろかったです。
- 学生さんのとてもやさしくて楽しいアプローチはとてもよかったです。子どもとのコミュ ニケーションがすぐできておにいさん、おねえさんと遊んでいるかんかくでした。実験の時 に「それはどうして？」と考えさせることもあってよかったです。

・科学実験だけでなく、子どもが喜ぶ飾りつけやグッズがたくさんあり楽しめました。
・子どもが自主的に出来る内容だった。





当日運営の様子

科学博士になろう2 生田

キャンパス近隣の児童館で開催している恒例の科学教室プログラムです。
短期間で企画・運営及び準備を進めなければならなかったのですが、毎週木曜日の昼休みを利用してミーティングを行うとともにリハーサル等も行いました。

日　時	A：企　　画　2025年11月6日（木）～2025年11月27日（木） 毎週木曜　昼休み　全3回 B：教室運営　2025年11月29日（土）
場　所	A：生田ボランティアセンター B：三田こども文化センター
内　容	小学生むけ科学教室のテーマ創りと開催
参　加	6名（A：6名　B：6名）
体　験	小学生20名
方　式	子ども4～5名に明大生1人が講師としてつくグループ制。
テーマ	キミも科学博士になろう！ふわふわ★クリスマスボトルつくり～光のふしぎ体験 水の入ったペットボトルにレーザー光を当て、一定条件下で光が全反射することを観察する。
連　携	三田こども文化センター



経営学部4年　YANG CHANY

今回のボランティアに参加した理由は、就職活動を終えた節目に、これまでとは異なる環境に身を置き、自身の視野を広げたいと考えたからです。数多くあるボランティア活動の中でも、子どもと関わる今回の活動は、子ども好きの私にとって特に魅力的に感じました。一方で、留学生かつ文系学生である自分が実験の仕組みを正しく、分かりやすく子ども達に伝えられるのかという不安も抱えながらのスタートでした。

当日は、光の屈折について説明する場面で少し苦戦しました。しかし、子ども達が目を輝かせながら見てくれる姿や、実験そのものを楽しんでくれる様子に助けられ、次第に緊張もほぐれ、私自身も心から活動を楽しめるようになりました。その中で特に意識したのは、一人で参加していた子への配慮です。親や友達と来ている子が多い中で、その子が寂しい思いをしないよう、積極的に声をかけ、会話を大切にするよう心がけました。

また、子ども達が笑顔で消臭剤のクリスマスボトルを完成させていく様子を見守る中で、教える立場であるはずの私の方が、むしろ大きな癒しと元気をもらっていることに気づきました。

今回の活動を通じて、普段の生活ではなかなか得られない多様な価値観に触れ、世代を超えて人と関わることの喜びを学びました。就職活動を通して凝り固まっていた私の視野は、今回の交流によって大きく広がり、勇気を出して一歩踏み出すことの大切さを実感しています。ここで得た気づきや人とのつながりの尊さは、社会人になる前の私にとって、非常に貴重な財産となりました。

農学部3年　西村 汐織

私は子どもが好きであることに加え、自分自身が中学・高校時代に出会った先生の影響で化学を好きになった経験があるため、子ども達にも理系分野の実験を「楽しい」と感じてもらいたいと思い、このボランティアに参加した。

当日は、子ども達一人ひとりの個性の違いがとても印象的だった。積極的にたくさん話しかけてくる子もいれば、ほとんど発言しないおとなしい子もいて、同じ年齢でもこれほど性格が多様なのだと驚いた。その違いを感じながら関わること自体が楽しく、学びにもなった。

一方で難しかったのは、保護者の方がそばにいる状況で子どもと接することだった。どうしても気を遣ってしまい、保護者がいない方が子どもと自然に関われると感じた。そこで自分なりに工夫した点として、注意を促す際に「手を止めて」と言葉で指示するのではなく、「手をパーにしてね」と伝える方法を用いた。すると子ども達が楽しそうに反応し、自然と話を聞く姿勢になった。この経験から、子どもには言葉だけでなく、動作や遊びの要素を取り入れた伝え方が効果的だと気づいた。

参加前は、実験を教えることが中心だと想像していたが、実際には子どもとの関わり方や場の雰囲気づくりがとても重要だった。このボランティアを通して、伝える側としての視点や工夫の大切さを学ぶことができた。





開催中の様子

かわさきサイエンスチャレンジ 生田

2025年度も川崎市最大のこども科学教室に出展しました。実験テーマは昨年と同様、「光のふしぎ～光のブーケをつくろう」。学生達は、事前にミーティングを行い、当日の運営方法、構成を考え行動することができました。

日　時　A実験練習会　2025年7月2日（水）、7月9日（水）
Bリハーサル　2025年8月1日（金）
C教室運営　2025年8月2日（土）

場　所　A B生田ボランティアセンター
Cかながわサイエンスパーク

内　容　小学生向け科学教室の開催

参　加　14名（A 13名　B 4名　C 5名）

体　験　小学生34名　保護者36名

方　式　小学生2名に明大生1名が講師としてつく小グループ制。
1クール45分で小学生は8名。

テーマ　光のふしぎ～光のブーケをつくろう
水の入ったペットボトルにレーザー光を当て、一定条件下で光が全反射することを観察する。その後、テグスとライト等を使ったブーケづくりをして、光がテグスの中で全反射することを確かめる。


光の全反射



教室運営のようす



理工学研究科M1　K. T

普段は静かな研究室でPCと向き合っている私にとって、会場を包み込む子ども達のパワフルな熱気はまさに異世界でした。

「よし、しっかりサポートするぞ！」と意気込みつつも、内心ではこのエネルギーについていけるだろうかと、少しだけ圧倒されていたのを覚えています。

しかし、ブーケ作りが始まると、その心配はすぐに楽しさへと変わりました。私が「こうだよ」と教える場面よりも、子ども達の「ねえ、こうしてもいい？」「こんなの思いついた！」という自由な発想に「なるほど！」と驚かされることばかり。教科書なんてない、彼らの探求心がそこに

はありました。
私の役目は、彼らの「やってみたい！」をほんの少し手助けするだけ。そのサポートがこれほど楽しく、やりがいに満ちているとは大きな発見でした。一つとして同じものはない、個性豊かなブーケが完成し、誇らしげな顔でそれを見せてくれる瞬間は、本当に最高でした。
「教えに行った」つもりが、いつの間にか私自身が、科学を楽しむ純粋な気持ちを彼らからプレゼントしてもらったような一日でした。
また子ども達の笑顔に会える機会があれば嬉しいです！

液体窒素実験 生田

液体窒素を用いた2種類の実験を生田キャンパス内で行うイベントです。2025年度も生田オープンキャンパス、生明祭への出展を行いました。2022年度から実施したチーム制で実施しました。4キャンパスから集まったボランティアの学生達は、チーム内で分担交代しながら、安全でスムーズな運営を行い、学生相互のコミュニケーションを図ることができました。

日　時	①2025年8月3日（日）〈生田オープンキャンパス〉 ②2025年11月2日（土）〈生明祭〉
場　所	生田キャンパス 屋外ブース
内　容	「極低温・超伝導の世界を体験しよう」 3テーブルに分かれて実験を行う： A　極低温の実験…液体窒素で{ゴムボール、バナナ、ピンポン球}を冷却する B　極低温の実験…液体窒素で{バラ、ほうれん草、酸素、二酸化炭素、空気}を冷却する C　超伝導の実験…リニア中央新幹線にも使用される超伝導体を使い、超伝導体のマイスナー効果やピン止め効果を体験する
参　加	18名（①9名　②9名）
体　験	約550人（①高校生　②一般来場者で多くはファミリー層）
方　式	屋外ブースに、原理説明ポスターを掲示する。明大生ボランティアは3つのチームに分かれ、チームごとに各テーブルの実験を運営する。来場者にデモ実験を見せたり、安全な範囲で来場者が実験を体験できるようサポートし、安全メガネの消毒を行う。また、実験の待ち時間に来場者に話しかけたり相談に乗ったりする。各チームは交代してすべてのテーブルの実験ボランティアを経験する。
発　案	安井 幸夫（理工学部教授）
引　率	安井 幸夫（理工学部教授）
待　機	井上 全人（理工学部教授）



理工学部1年　可児 一歩（②に参加）

私は数学科に在籍していて、化学的、物理学的な現象及びその実験については特別強い興味関心や理解があったわけではなかったのですが、今回、そのような実験を生徒として教わるのではなく、サポートする側として行うということに興味を持ってこのボランティアに参加しようと思いました。当初は部屋の中で人数も絞って固い感じで行うのかなと思っていたのですが、実際は屋外でかなりオープンな感じで行いました。 実際にボランティアをやってみて最初に感じたことは、実験を

サポートする側にまわって行うのはとても楽しいということでした。実験に来てくれた方々は小さな子どもが多く、今している実験について細かな内容を逐一説明するといったことはなかったのですが、普段は触れ合わない初対面の方々と一緒に物を凍らせたり、浮かせたりと実験をすることは自分が今までにしたことがないことだったのでとても楽しかったです。また、実験を繰り返すうちに自分の中で実験の内容について自分なりに噛み砕いて理解していった感覚もあってとても面白かったです。 今回のボランティアに参加して、今後も自分がまだ知らないことに踏み出していく勇気が得られたように思います。

匿名（②に参加）

液体窒素実験ボランティアに参加して、子ども達と直接関わりながら科学の楽しさを伝えることができたのが印象的だった。最初は少し緊張していたけれど、子ども達が興味を持って目を輝かせながら実験を見てくれる姿を見て、自然と自分も笑顔になった。液体窒素の特性や仕組みを説明する中で、理論的な理解が実際の現象と結びつく瞬間があって、自分自身もすごく勉強になった。もっと時間があれば、なぜそうなるのかを子ども達にもう少し詳しく伝えたかったと思う。 また、他学部・他学科の学生と協力しながら進めるのも新鮮で、普段関わる機会の少ない人達と一緒に活動することで、視野が広がったと感じた。思い切って参加してみて本当に良かったと思った。ボランティアを通して新しいことに踏み出す勇気が少しついた気がするし、科学を通じて人とつながる楽しさを改めて実感した。





来場者が体験する様子

小学校でのプログラミング授業のサポート 生田

2022年より開始された理工学部と川崎市立三田小学校との連携事業の一環として、プログラミング学習に関する出前授業を実施しました。

本授業では理工学部情報科学科の井口幸洋教授が５年生を対象にScratchを用いたアニメーション制作や簡単なゲーム作成の指導を行い、６年生を対象にmicro：bit（マイクロビット）を活用したロボット制御の授業を実施しました。学生14名がボランティアとして参加し、児童への学習支援や操作補助を行いました。

５年生向け授業では、座標平面の説明から学習を開始しました。児童達は初めて触れる内容に集中して取り組み、授業が進むにつれて、スプライト（動物のキャラクター）が鳴いたり動いたりする様子に興味を示し、積極的にPCを操作する姿が見られました。一方で、コード入力に苦戦する場面もありましたが、学生達が各テーブルを回りながら丁寧にサポートを行い、児童達が安心して学習に取り組めるよう支援しました。

６年生の授業では、児童各自でPCにコードを作成し、その情報をUSB端子を通じて車輪付きロボット（車）へ読み込ませ、実際に動作させる内容を実施しました。ロボットがプログラムどおりに動作すると、教室内では歓声が上がり、児童達は床に膝をつきながら熱心に観察していました。学生達は、児童一人ひとりに寄り添いながら活動していました。

学生達は終始教室内を巡回し、児童への声掛けや学習支援を積極的に行うなど、授業運営を支える重要な役割を担いました。今回の活動を通じて、児童達がプログラミングへの興味・関心を深めるとともに、学生達にとっても地域貢献や教育支援を実践的に学ぶ貴重な機会となりました。

日　時	A事前講習　2025年8月1日（金） B Scratch授業　2025年9月11日（木） C micro: bit授業　2025年9月16日（火）
場　所	A生田キャンパス内理工学部教室 B C川崎市立三田小学校
内　容	小学校の総合的な学習の時間「プログラミング学習」授業にて児童のサポートを行う。
参　加	7名（A７名　B７名　C７名）
体　験	小学生　約165名（B約80名　C約85名）
引　率	井口 幸洋（理工学部教授）



理工学部3年　宇山 直希

このボランティアには、子ども達にプログラミングの楽しさを知ってもらう手伝いがしたいと思い参加しました。私自身、小学生の頃にScratchを始めて楽しいと感じたのがきっかけでプログラミングをするようになり、それが高じて情報科学科に入ったので、その経験からこの活動に興味を持ちました。参加にあたっては楽しんでもらうことを目標にしていました。

活動が始まってまず感じたのは、子ども達の積極的に取り組む姿勢でした。授業時間の都合上、やや急ぎ足になってしまう部分があるのですが、その中でも自分なりに考えながら真剣にやっている姿が印象的でした。中には自分で資料を読んで先に進めて空いた時間で応用的なことをする子もおり、驚かされました。また、そういった真剣に取り組む空気があり、プログラムがうまく動くと嬉しそうにしてくれるので、サポートする人間としてはとてもやりがいがあり楽しかったです。困っている子にアドバイ

スする際には、「ここがこうだからこうなっている」というように、なるべく理由を付けて話すことを意識しました。ただ、わかりやすく伝えられないこともあったので、伝える力の大切さを感じました。

全体を通して授業を楽しんでくれていたように感じ、嬉しかったです。また、自分を見つめ直すよい機会にもなりました。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

理工学部1年　上井 陽斗

私は小学生の時にプログラミングの体験教室に参加し、初めてプログラミングに触れました。そこで、プログラミングを楽しいと感じ、プログラミングに興味を持ちました。今回の小学校情報教育ボランティアに参加したのは自分自身が感じたように、プログラミングの楽しさを感じてもらいたいと思ったのが理由です。応募するときには「参加するには自分には力量が足りないんじゃないか」と不安でしたが、内容が春学期の授業で触れたmicrobitであったこと、事前に講習がありmicrobitの動かし方を再確認できたことで、不安なく当日を迎えることが出来ました。

当日は、子ども達が学んでいく過程で、作ったものを実際に動かしその様子を楽しそうに見たり、友人と見せ合ったりしているのが印象的でした。また、早く出来た人が資料でこれから行う範囲を見ながらより難しいプログラミングを積極的に作っていたのを見て、プログラミングを楽しんでもらえていると感じました。

私は今回の情報教育ボランティアが初めてのボランティアでした。応募するまでは悩みましたが、子ども達が笑顔で参加してくれているのを見て参加して良かったと思いました。また来年も参加しようと思います。





授業中の様子

ごみ拾い活動 和泉


活動の様子

明大生の環境問題への意識向上を目的として、年間を通じて不定期にごみ拾い活動を実施しています。今回は、その一環として、公認ボランティアサークル「ぱれっと」と合同で活動を行いました。

本活動では、和泉キャンパス周辺のごみ拾いを通して、地域社会の一員としての役割を意識するとともに、身近な環境美化への取り組みが社会貢献につながることを実感する機会となりました。参加した学生は、地域の環境に直接関わることで、環境問題への理解を深め、継続的な行動への意欲を高めることができました。

日　時	2025年5月19日（月）　昼休み
場　所	和泉キャンパス周辺
参　加	23名（うち12名ぱれっと）
協　力	公認ボランティアサークル ぱれっと

清掃活動 中野


活動の様子

ボランティア活動の第一歩として清掃活動を実施し、今回は他キャンパスから2名の学生が参加しました。

清掃作業を通じて、普段交わる機会のない他キャンパスの学生同士で様々な話ができ、充実した交流の場にもなったようです。

少人数での実施でしたが、身近な環境美化について考え、親睦を深める有意義な機会となりました。今後も本活動を継続していく予定です。

日　時	10月24日（金）
場　所	中野キャンパス周辺・中野駅前
参　加	学生2名

環境ワークショップへの出展 生田

生田キャンパス近隣にある中学校で『人類の可能性～宇宙と地球～』をテーマにワークショップが行われ、学生達が授業を行いました。

川崎市立枡形中学校は、総合学習として、エネルギー・環境教育に取り組み続けています。毎年11月にワークショップが行われ、10以上の企業や団体が中学生に授業を行っています。

2025年度も、生田キャンパスの学生から広くボランティアを募集しました。実験班と授業の構成を行う教育班に分かれて活動しました。

日　時　①テーマ創り・準備・予備実験 2025年5月30日（金）～11月7日（金）　全15回
②授業運営　2025年11月14日（金）　13：40～15：10
③振り返り　2025年11月21日（金）　12：40～13：20

場　所　①生田ボランティアセンター・川崎市立枡形中学校
②川崎市立枡形中学校
③生田ボランティアセンター

内　容　中学校の総合的な学習の時間「エネルギー環境ワークショップ」にて環境に関する授業を行う。
《授業の目的》
・私たちの身近にあるマイクロチップの存在に気づく
・なぜマイクロプラスチックは自然に流失してしまうのか。またその危険性について考える
・実際に砂浜の砂からマイクロプラスチックを取り出し染色したものを、顕微鏡で観察してみよう

参　加　①108名　②7名　③7名

体　験　中学生30名



農学部3年　北野 晴来

中学校で行われた「環境・エネルギー教育」のワークショップに出展しました。活動を通して最も印象的だったのは、顕微鏡を覗いた中学生達が自分達の手でマイクロプラスチックを発見した時の驚きの表情です。中学生自身が自ら体感することで学びにつながることを私も実感しました。また、複雑なテーマや実験内容を中学生にもわかる言葉で伝える過程で、相手の視点に立って物事を考える重要性に改めて気づくことができました。生徒達が最後まで積極的に参加してくれたことは、チームとして大きな成果だと感じています。今回得た「周囲を巻き込んで目標を達成する力」は社会人になっても大いに活かせると考えています。


ミーティングの様子



「マイクロプラスチックについて知ろう」講座

３大学連携オンライン講座「琵琶湖ツーリズム！大学生が考える環境ボランティアの未来2025」（関西・法政・明治３大学連携事業）

日　時　2025年10月11日（土）　13：00～14：30
方　法　オンライン（Zoom）
内　容
・琵琶湖の環境問題
・特定外来生物への対策
・駆除活動について
・法政大学、関西大学の学生との意見交換会
参　加　明大参加者（学生３名）
目　的　専門家の講義により、琵琶湖の環境保全、特定外来生物、および、駆除活動の概要・心構えなどについて学ぶとともに、３大学学生同士の交流の場を持つことにより、今後の３大学連携活動の一助とする。
講　師　滋賀県琵琶湖環境部自然環境保全課生物多様性戦略推進室　副主幹　中井克樹氏
主　催　関西大学ボランティアセンター



【明治大学参加者　事後アンケートから抜粋】

・琵琶湖の外来種による在来種の個体数の減少などかなり深刻 な影響を受けていることに驚きを受けた。
・環境問題と琵琶湖に興味があったため参加しました。琵琶湖の現状が詳しくわかりました。より今の琵琶湖の環境問題に関心を持ちました。
・生物多様性や環境保全の分野に興味があり大学のお知らせで今回の講座を受講しました。琵琶湖の生態系や成り立ちについてとても勉強になりました。

日　時　2025年11月9日（土）　9：30～18：00
方　法　対面
内　容　特定外来種「ナガエツルノゲイトウ」の駆除
参　加　明大参加者（学生１名）
目　的　琵琶湖には、『ナガエツルノゲイトウ』や『オオバナミズキンバイ』などの特定外来生物が生息しており、生態系に深刻な影響を与えているため、駆除活動を体験し琵琶湖の環境を守りながら、環境問題について考える。
講　師　滋賀県琵琶湖環境部自然環境保全課
生物多様性戦略推進室　副主幹
中井克樹氏
主　催　関西大学ボランティアセンター



学生の自主的な活動の支援

能登半島支援～石川県七尾市災害ボランティア～（公認ボランティアサークル しんちーむ）

日　時　2025年12月13日（土）～12月14日（日）
場　所　石川県七尾市
内　容　作業系支援（家財の仕分け・災害ゴミの仮置き倉庫の整備・解体前の家屋の清掃）
ソフト系支援（お茶会・マッサージ）
参　加　11名




活動の様子

参加学生の声

文学部3年　長郷朝史

1日目のソフト系支援（お茶会・マッサージ）をする中で、地元の方から避難のために高台にある寺に逃げて寒い夜を過ごしたこと、元旦の地震だったことでたまたま親戚が集まっていたことなど、リアルな声を聞くことができた。2日目の片付け作業では、廃棄される災害ごみであっても元々は家主の方の生活用品だったことを、実際に見てモノに触れることで実感できた。今後のサークル活動に活きる非常に有意義な経験であった。

法学部2年　大内凛乃

「片付けを2年しているだけなんです。何にもならないかもしれない。でも七尾を守っていく」2日目の活動後集会で聞いた言葉です。実際その日行った家財の仕分けの手伝いは果てしなく、虚しいものでした。かつてはよく読まれていただろう書籍、写真、漬小物、衣服。配布された分別ガイドと丁寧に照らし合わせながら、大切な思い出が災害ごみになる悲しさで胸が一杯になりました。熱心に作業する現地の皆さんを見て、将来行政で働きたい気持ちが大きくなりました。もっと現地に行って作業して知りたいと思う経験になりました。

文学部3年　本島尚典

今まで被災地支援として福島県に訪れたことはあったが、能登での支援は今回が初めてだった。地震からもう2年を経とうとしているので、復旧は進んでいると思っていたが、地震の痕跡は至る所に見られ

た。また、地震の影響で家の中に物が散乱している状態のままの家を見た時に、まだ復興には時間がかかることを実感し、現地の状況と外の人が考える現地の状況に大きな乖離を感じた。今後の活動では外から見た先入観ではなく、実際に支援を必要とする人の視点に立って課題を見極めたいと思った。



活動メンバー

石川県穴水町での被災地支援・交流活動（公認ボランティアサークル LINKs）

日　時	2026年3月6日（金）～3月8日（日）
場　所	石川県穴水町
内　容	被災地域住民との交流
参　加	10名
協　力	認定特定非営利法人 レスキューストックヤード
センターの役割	相談（生田）



農学部1年　藤井 泰生

私たちLINKsは春休みに石川県穴水町で災害ボランティアを行いました。

「災害ボランティア」と聞くと、瓦礫撤去や炊き出しを思い浮かべる人が多いと思います。しかし、今回私たちが行ったのは、被災者の方への「心のケア」をテーマにした活動です。令和6年能登半島地震から2年が経った今、自分たちに何ができるのかを考え、準備を重ねて現地へ向かいました。

実際に現地を訪れてみると、被災者の方々は想像以上に明るく、私たちの活動にも積極的に参加してくださいました。また、震災当時の話だけでなく、現在困っていることや石川県の魅力についても教えてくださいました。ニュースやSNSだけでは分からない「今の被災地」を知ることができたと感じています。

今回の活動を通して、私は人と人との支え合いの大切さを改めて実感しました。活動場所を無償で提供してくださった施設の方々や、活動内容について助言をくださった穴水町役場の方々など、多くの人の協力があったからこそ今回の活動を行うことができました。

また、被災地を「助ける場所」として見るだけではなく、現地の人と関わり、現状を知ることも大切だと再確認させられました。私たちLINKsは、今回受け取った温かさを別の誰かへ繋げられるよう、これからも活動を続けていきたいです。



活動場所での様子



作成した地図

第14回 NIPPON ITチャリティ駅伝（Tree）

日　時	2025年11月16日（日）
場　所	お台場セントラル広場
内　容	IT企業のチャリティ活動を目的として、開催された駅伝イベントにボランティアとして参加。今年の開催地お台場。団体としては、コースの設営や人員整理、片付けなどを主に行った。
参　加	11名
主　催	NIPPON ITチャリティ駅伝実行委員会



経営学部4年　内藤 大貴

集合が朝8時という非常に早い時間帯であったのにも関わらず、メンバー全員に集合してもらえ、嬉しく感じた。メンバーの中には、朝4時に起きてイベントに参加してくれた方もおり、残り少ないが今後の活動にもより注力していきたいと思う。

イベントでは、朝礼から始まり担当ブロックに配置され、大会中は主に人員整理に勤しんだ。朝早くの集合だったが、配置から大会開始までに待ち時間が多くあったため、集合時間の調整や要望など、来年度の担当に引き継いでおきたい。また一方で、普段活動に参加していない方も参加してくれていたため、待ち時間をメンバー間の交流の時間に出来た事はとても有意義だったと感じる。

今回イベントにおけるリーダーを担当させていただいたが、至らない点が多かったと思う。だが参加してくれた幹部やメンバーの支えもあり、無事にイベントを終える事が出来た。今年度の活動も終わりに差し掛かっているが、悔いの無いよう、気を引き締めて活動に臨んでいきたい。

TABLE FOR TWO
（公認ボランティアサークルぱれっと）

TABLE FOR TWO（略称：TFT）は、開発途上国の子ども達と先進国の私たちが、食事を分かち合い、食の不均衡を解消することを目標とした活動です。食堂の運営会社にご協力頂き、自分達で考案したバランスの良いメニューを学生食堂で提供しています。1食につき20円（開発途上国の給食1食分）をTABLE FOR TWO internationalに寄付し、栄養問題の解決に向けての支援をします。世界の食の不均衡や、食と健康、世界の食糧事情について考えるきっかけになることを目指して活動しています。



チラシ

日　時　①2025年6月19日（月）～6月20日（金）　昼休み
②2025年12月8日（月）～12月10日（金）　昼休み

場　所　和泉キャンパス和泉の杜（学生食堂）

参　加　①7名　②3名

協　力　株式会社ハートフルダイニング、株式会社明大サポート

センターの役割　活動場所等の提供、広報活動の支援、相談（和泉）

メニュー	販売期間	価格	販売数
大豆ミートハンバーグのトマト煮込み	6月19日（月）・20日（火）	580円	205食
大豆ミートハンバーグきのこデミソース定食	12月8日（月）・9日（火）10日（水）	580円	190食
寄付金額：①4,100円　②3,800円（一食につき20円を寄付）			



商学部2年　田中 良明

TFTと学食のコラボ企画は、世界の「食の不均衡」という大きな課題に対し、身近な日常から具体的な行動を起こせる点に意義を感じました。自分が携わったメニューを学生が選んでくれる姿を見た瞬間は、数字以上の達成感があり、確かなやりがいを得ることができました。

一方で、メニュー開発には困難も伴いました。人気の学食メニューはカロリーや脂質が高くなりがちなため、TFTの基準を満たしつつ売上を確保しようとすると、どうしてもヘルシーさが前面に出てしまい、ガッツリ食べたい学生層から敬遠されがちでした。この課題に対し、広報戦略で解決を図りました。チラシにロゴやイメージカラーを効果的に配置し、インパクトのあるデザインにしました。また、暖色のベースカラーや大きな写真で食欲を誘い、寄付に繋げるという動線をデザインし、普段TFTに関心がない層への訴求を試みました。

「1食食べるだけで支援になる」という手軽さは、多くの人を巻き込む可能性を秘めています。しかし同時に、メニューのマンネリ化や学生の学食離れなど、学内コラボという定型化された活動の限界も

痛感しました。今後は学内にとどまらず、地域の一般飲食店や子ども食堂と連携するなど、より広いフィールドで食の不均衡是正とTFTの認知拡大を目指すべきであると考えます。


チラシ配り


大豆ミートのトマト煮込みハンバーグ

Meal for Refugees（公認ボランティアサークルMIFO）

「Meal for Refugees（M4R）」は、認定NPO法人難民支援協会（以下JAR）が、日本で暮らす難民の方々と作成した母国の料理のレシピ本『海を渡った故郷の味～Flavors Without Borders』から生まれた社会貢献プロジェクトです。

公認サークルMIFO（Meiji International Friendship Organization）が、食堂の協力の下、身近な「食」を通じて、より多くの大学生・教職員等に難民問題に関心・理解を深めてもらうことを目的に実施しています。売り上げの一部はJARを通して、日本で暮らす難民の方々に寄付されます。



チラシ

日　時	①2025年6月16日（月）～6月18日（金）　昼休み ②2025年12月11日（木）～12月12日（金）　昼休み
場　所	和泉キャンパス和泉の杜（学生食堂）
内　容	・学食にて難民の故郷の味を再現したメニューを導入する ・難民問題に関する啓発（学食へのポスターの設置、勉強会の開催など）
参　加	①15名　②12名
協　力	株式会社ハートフルダイニング、株式会社明大サポート
センターの役割	活動場所等の提供、広報活動の支援、相談（和泉）

販売メニュー	販売期間	価格	販売数
鶏肉と野菜のスパイシー炒め定食	6月16日（月）・17日（火）	580円	225食
鶏肉と小松菜のカレー定食	6月18日（水）	580円	98食
鶏肉とジャガイモのスパイス煮込み	12月11日（木）・12日（金）	580円	187食
寄付金額：①6,460円　②3,740円（一食につき20円を寄付）			



文学部2年　大西 晴

今回の「M4R」では、学生食堂で難民支援を目的としたメニューを提供し、1食あたり20円の寄付につながる活動を行いました。日常の食べるという行為が支援に直結する点は、「全商品リサイクル」に比べ参加のハードルが低く、支援を継続する上でも非常に有効で支援の入口として大きな意義を感じました。

当日は、チラシ配布や声かけ、SNSでの周知を中心に行い、寄付の仕組み（1食あたりの寄付額や支援先）を短く分かりやすく伝えることを意識しました。単に、「支援になります」と言うだけでなく、「食べるだけで寄付になる」「普段の昼食が支援につながる」と具体的に言い換えると、興味を示して質問してくれる学生が増え、活動の趣旨が伝わりやすくなることを実感しました。

一方で、説明する時間が取りづらい点、通り過ぎてしまう人が一定数いる点、また、食堂ではない場所で昼食を取る人もいるため周知することができない点が課題として見えました。

次回に向けて、注文前に目に入る場所への説明をいれたポスターの設置、SNSをより強化し、周知活動を行いたいと思います。さらに、提供数や寄付額などの共有をすることで、より参加意欲が湧くのではないかと考えました。

今回この取り組みに参加していただいた皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



鶏肉と野菜のスパイシー炒め定食



6月チラシ配布の様子



12月チラシ配布の様子

全商品リサイクル活動（公認ボランティアサークルMIFO）

「全商品リサイクル」は、明治大学の学生・教職員から不要になった衣類などを回収し、企業やNPO団体を通じ難民キャンプへ届ける活動です。秋学期の活動では、ユニクロよりディスプレイの提供を受け、実施期間後も回収ボックスを継続設置し認知度の向上を図りました。

この活動を通して、学生が主体となって難民の方々への実質的な支援を行うと同時に、より多くの学生や教職員等に難民問題への理解を広げ、国際問題への関心を高めること、資源の有効活用につなげること等を目的に、多面的な視点で取り組んでいます。

日　時	①2025年6月9日（月）～6月13日（金）　昼休み ②2025年12月15日（月）～12月19日（金）　昼休み
場　所	和泉キャンパス第一校舎前
参　加	①24名　②23名
回　収	①52着　②64着
協　力	株式会社ユニクロ
センターの役割	相談、広報活動の支援、作業場所及び保管場所の提供（和泉）



文学部2年　大西 晴

今回の全商品リサイクルでは、学生や教職員の方から不要になった衣類を回収し、リサイクルにつなげることで、身近な行動が社会課題の解決に結びつくことを実感しました。呼びかけでは、ただ「回収します」と伝えるだけでなく、回収後の行き先や、衣類が資源として循環する意義を短く添えました。その結果、足を止めて質問してくださる方が増え、対話を生むことの大切さを学びました。また、メンバー同士で活動意義や活動内容を事前に明確にしたことで、初参加の人でも動きやすく、チームとしての一体感も高まったと感じました。ユニクロ様のご協力により、備品やリサイクル製品、立て看板などを貸し出していただき、従来の単なる呼びかけだけでなく、遠くからでもその場所の存在に興味をもってもらえて、既存メンバーにとっても楽しみながら参加することに繋がりました。一方で、曜日によっての当該ボランティア活動への参加学生人数の偏りが大きかった点、時間帯によって人通りに差があり、呼びかけづらい時間帯があった点など改善点が見受けられました。前者は、参加学生の人数を増やすことや事前に参加人数を決めておき、偏りを減らすことが大切だと感じました。後者では、SNSなどによる事前告知をより強化することが大切だと感じました。次回は以上の改善点を踏まえた上で、より活動成果をあげられるようにしたいと考えます。





回収の様子（12月）

献血応援！学食コラボメニュー（公認ボランティアサークル学生赤十字奉仕団クローバー）

公認ボランティアサークル「学生赤十字奉仕団クローバー」は、学内の献血推進活動を実施しています。今回は新たな取り組みとして、学生食堂の協力を得て献血応援メニューの販売を行ったほか、学内の売店で血液に良い栄養素を含む商品のPOP掲示を実施し、日常的に献血への関心を高める工夫を行いました。また、呼びかけも積極的に行い、多くの学生に献血の重要性を伝えました。その結果、献血者数は合計294名に達し、これらの取り組みが、学生の献血への理解促進と参加意欲の向上に大きく寄与しました。



チラシ

日　時	2025年10月6日（月）～10月10日（金）　昼休み
場　所	和泉キャンパス和泉の杜（学生食堂）
参　加	5名
協　力	株式会社ハートフルダイニング、明大マート
センターの役割	活動場所等の提供、広報活動の支援、相談（和泉）

学食献血応援コラボメニュー	販売期間	価格
牛野菜炒め定食	10月6日（月）～10月10（金）	600円



文学部2年　髙山 実桜

明治大学における献血の現状について、「血色素不足による不採血者が多い」と、東京都赤十字血液センターの方からお伺いしたところから本企画は始まりました。

今回は応援メニューの実施ということで、食堂の机にPOPを置いていただくことができました。そのおかげで、前回よりも事前告知を効果的に行えたことは大きかったと感じています。実際、私の周りにも「事前に知れたから、空きコマにやる予定だった課題を早めに終わらせて、その時間に献血に行くことができた」という人がいました。今後も同じように取り組めるよう、後輩へしっかり引き継いでいきたいです。

6月頃から企画を進め始めましたが、夏休みは学食が閉まっている関係もあり、実施まで時間に余裕がなかった中でこうして無事に終われてとてもほっとしています。また、東京都赤十字血液センターや、学生食堂、明大マートなど多くの方々にご協力を頂き、本当に感謝しています。ありがとうございました。


献血応援コラボメニュー
牛野菜炒め定食



学内売店でPOP掲示

献血活動への呼びかけ（公認ボランティアサークル学生赤十字奉仕団・クローバー）

学生赤十字奉仕団クローバーの学生が献血への参加周知活動を行いました。

日　時　2025年5月26日（月）　10：20～11：00
12：30～16：30
場　所　中野キャンパス1階アトリウム
参　加　1名
献血者　36名
センターの役割　広報活動の支援（中野）



活動の様子

大学生と宿題を進める会（Tree）

日　時　2025年8月20日（水）　10：20～15：30
場　所　千代田区役所かがやきプラザ1階
内　容　子どもたちの「主体的な学び・交流」を支えるため、小学生と交流しながら宿題を教える。
参　加　学生9名



商学部4年　正岡 千奈

小学生に宿題を教える活動を通して、学習支援だけでなく子どもとのコミュニケーションの大切さを学んだ。分からなかった問題が解けて、「わかった」といってくれた瞬間や、最初は緊張していてうまく話してくれなかった子が、だんだん打ち解けて楽しそうにしている姿などをみた時はやりがいを感じた。活動中は集中力が続かない場面もあったが、声かけや雰囲気作りを工夫する事で前向きに取り組んでもらう事が出来たと感じている。



活動の様子

スポGOMI inすみだ環境フェアへの参加（Tree）

「スポGOMI」とは「ごみ拾いはスポーツだ！」を合い言葉に、制限時間内（2時間）に定められたエリア内で拾ったごみの質と量をポイントで競う、チーム対抗で競技としてごみ拾いを楽しむイベントです。今回の大会では、Treeは「運営ボランティア」と「競技者」としてそれぞれ参加しました。

日　時　2025年6月14日（土）　8：40～13：00

場　所　オリナス錦糸町（東京都墨田区）

参　加　20名（運営ボランティア3名、競技者17名）

内　容　【運営ボランティア】3名

1. 受付でのチーム確認、マニュアル、ごみ袋、ゼッケンの配布
2. 机や備品の運搬
3. 計量器を使ったごみの測定
4. ゼッケンの片付け

【競技者】17名（4チーム、4名×3、5名×1）

1. それぞれのチームが拾った最終的なごみの質と量をポイント換算し、そのポイントの合計をチームごとに競いました。
2. 50分間、路上に捨てられたごみの回収を頑張りました。
3. チームの中で1人「審判」を決め、審判はチーム全体への大会ルールの説明と、大会本番中の違反の監視を行いました。
4. 備品として、トング1・ビブス1・軍手人数分・ルール冊子1が、また参加賞として、公衆浴場券・除菌シート・GATSBY・お菓子・飲み物が人数分配付されました。
   最終結果は、4チームそれぞれ12位、18位、24位25位で、拾ったゴミの総重量は5.08kgでした！



情報コミュニケーション学部4年　勝本 真望

今回は、Treeとして2回目のスポごみへの参加をしました。私含め、幹部には昨年経験済みの4年生が多かったため、当日の動きとしてはスムーズに行う事ができました。また、渉外の片山や、渉内の関をはじめ、スポGOMI連盟の方と事前に連携を執る事で、よりイベントを楽しみながら乗り切る事ができました！最終的には参加メンバーから「共通のタスクを通して、仲を深めることができて良かった！」「楽しかった！また参加したい」などの好意的なフィードバックを得ることができて安心しました。今回得た教訓は、次回のスポGOMI参加時に役立てていきたいです。





活動の様子

善福寺公園の清掃（Tree）

日　時	春学期　2025年7月6日（日）　13：30～15：00 秋学期　2025年12月7日（日）　15：20～17：00
場　所	都立善福寺公園（東京都杉並区）
内　容	清掃活動（落ち葉収集・排水溝掃除）
参　加	春学期　52名 秋学期　32名



商学部4年　片山 菜央

毎年恒例である、杉並区の善福寺公園で清掃活動をしてきました。本来であれば、5月に新歓行事での一環で行うはずでしたが、あいにくの雨で延期となり7月の開催となりました。夏開催は初めてでしたが、本当に暑かったです。ですが、メンバー待望の活動でもあったため、無事開催できて良かったです。地域の人々に愛される公園で清掃活動をすること、公園を運営している方々と交流できる事はとても貴重な経験で有意義な時間でした。みんなも汗水たらしながら、会話も弾み活動ができていたようで良かったです。夏の太陽に負けないくらい、私達も燃えていました。

情報コミュニケーション学部4年　神藤 完太

Treeとして善福寺公園清掃に参加した。本活動は年に2回、季節ごとに実施している。今回は冬季の実施であったため、主に落ち葉の清掃を中心に活動を行った。公園内だけでなく、公園周辺の住宅前や歩道にも落ち葉が多く見られ、地域全体の環境美化に貢献する事を意識して清掃を進めた。

活動中には、犬の散歩をしている近隣住民の方々から、直接感謝の言葉をいただく場面があり、学生ボランティアとして地域の日常生活を支える役割を果たせていることを実感した。年2回と言う限られた機会であっても、地域の方々との接点を生みだし、信頼関係の一端を築くことができる点に、本活動の大きな意義があると感じた。今後も季節や地域の状況に応じた活動を通じて、善福寺公園および周辺地域の環境維持に積極的に貢献していきたい。



活動メンバー

BLUE SANTA ごみ拾い　海の日海浜清掃（Tree）

日　時	2025年7月21日（月）　15：30～18：00
場　所	片瀬東浜海水浴場
内　容	海浜清掃
参　加	40名



情報コミュニケーション学部４年　勝本真望

今年も例年に引き続き、ブルーサンタに参加させていただきました。今年は、片瀬東浜海水浴場で行われた清掃活動に参加し、昨年の葛西臨海公園での活動と比べて、規模の大きさや参加者の多さに驚かされました。多くの方が海洋汚染やポイ捨ての問題に関心を持ち、行動に移している事を実感し、改めて問題の深刻さに気付かされる機会となりました。

当日は、メンバーそれぞれが役割を分担し、連携しながらごみの回収を行いました。暑さや足場の悪さといった厳しい環境の中でしたが、お互い体調に気を付けながら協力してやり遂げることができました。少しでも環境保全や、地域の方々が安心して過ごせる居場所作りに貢献できていたら嬉しく思います。また、「海岸清掃」と言う共通の目的に向かって活動したことで、メンバー同士の交流も深まりました。初参加メンバーも多くいましたが、イベントが終わるころには打ち解けて、全員が和やかに話している様子が見られ、安心しました。

今回の活動は、環境問題について考えるとともに、チームとして協力やつながりを実感できた貴重な経験となりました。ご協力いただいた関係者の皆さまに感謝申し上げます。これからも楽しく、まじめに活動を続けていきますので、今後ともよろしくお願いいたします。



活動メンバー

明大前駅周辺清掃活動（公認ボランティアサークルぱれっと）

環境問題への啓発活動を主な目的とし、公認ボランティアサークルの「ぱれっと」が活動しています。2025年度の清掃活動は、昼休みを利用し和泉キャンパスの周辺で行いました。ごみ拾いをする際は、燃えるごみ、燃えないごみ、ペットボトル、びん・缶をそれぞれ分類してごみ袋に入れ、種類ごとに重さを量って記録し、処分します。

毎週行っているこの活動はメンバー同士のコミュニケーションの場でもあり、今後も継続して行っていく大切な活動です。

日　時	週1回程度、昼休み
場　所	和泉キャンパス周辺、甲州街道沿い、明大駅前通学路等
参　加	179名
回　収	一回あたり平均：燃えるごみ500g、燃えないごみ250g、缶23g ペットボトル23g
センターの役割	作業場所及び保管場所の提供（和泉）



政治経済学部2年　戸丸 新

2025年度の活動では、1年生を中心に多くのメンバーが継続して参加してくれました。そのおかげで、分別の役割分担や備品（トング、ビブス等）の事前準備など非常に円滑に運営できたことは大きな収穫です。一方で、活動を続ける中で見えてきた課題もあります。和泉キャンパス周辺では、清掃したばかりの場所に再びゴミが溜まっていることも少なくありません。もちろん、それを清掃するのが私たちの役割ですが、本来は学生一人ひとりが環境への意識を持ち、ゴミを捨てない文化を作ることが理想です。来年度からは、今年支えてくれた1年生たちが主体となって活動を引き継ぎます。新体制となる来年度は、ただ清掃するだけでなく、どうすれば学生や周辺住民の意識を変えていけるかという視点も大切になってくるはずです。これまで培ってきたチームワークを活かし、より良いキャンパス環境を目指し、自分たちらしい活動を展開してくれることを期待しています。



活動の様子

江の島新歓清掃
（公認ボランティアサークル LINKs）

日　時	2025年5月25日（日）
場　所	江の島付近の海岸
内　容	海岸清掃をしながら、1年生がLINKsの活動に来たいと思えるようになるように同級生、先輩とのつながりを、また、上級生同士のつながりを深める活動をしました。
参　加	200名
センターの役割	備品貸し出し（生田）



農学部2年　寺田 利希

江ノ島新歓は1年生を交えての初めてのボランティア活動で、江ノ島の東浜の清掃を行います。百人以上のメンバーが班で細かく振り分けられ、その班ごとにごみ拾いを行うLINKsの一大イベントです。

班は上級生が1人か2人、1年生が5人ほどで構成されていて、トングと軍手、指定されたごみ袋を受け取り、海岸へ向かいます。

歩いて5分ほどで目的地である東浜に着きます。東浜に着いたら、人の少ない奥の方へ行き海岸線に沿ってごみ拾いを始めます。

最初はお菓子の包装紙やたばこの吸い殻など比較的大きいごみが目につきます。

トングなどを使って素手で触れないようにし、可燃であるか不燃であるか気を付けながら分別しごみ袋に入れていきます。砂や貝殻などに紛れて最初は見つけにくかったですが、目が慣れていくにつれて小さいプラスチック片やガラス片などを見つけることができるようになります。

だんだんと宝探しをしている気分になり、無我夢中で拾っているうちにメンバーも和気藹々と自然に会話ができるほどに打ち解けていました。

最後に全ての班で集合し記念撮影を行います。ひと仕事終えた後のみんなの顔は晴れ晴れとしていて、改めてボランティアの素晴らしさを実感しました。

自分たちの活動で、いつか海岸にごみを捨てる人がいなくなればいいなと思いました。



活動終了後の様子

エコキャップ回収（Tree）

キャンパス内に設置された回収ボックスにペットボトルのキャップを集め、回収業者に引き渡します。その後資源として売却され、売り上げを「認定NPO法人世界の子どもにワクチンを日本委員会」を通じて発展途上国の子ども達のワクチン接種のために寄付しています。

日　時	2025年4月7日（月）　13：00～14：00 7月2日（水）　13：00～14：00 11月13日（木）　13：30～14：30 2026年1月23日（金）　13：00～14：00
場　所	駿河台キャンパス
内　容	駿河台キャンパス内でのペットボトルキャップの回収 回収したキャップの部室への運搬及び保管
参　加	34名
センターの役割	相談、当日対応、備品の提供（駿河台）



文学部4年　舟木 瑠渚

参加人数こそ多くはなかったものの、メンバー全員が協力し合い、スムーズに活動を進めることができました。ボックスには想像以上の量のエコキャップが集まっており、エコキャップ回収やワクチン寄付に対する認知度の高まりを実感しました。Treeの伝統的なボランティア活動の一つでもあるため、今後も大切に継続していきたいと感じました。





エコキャップ回収の様子

エコキャップ業者引き渡し（Tree）

日　時	2025 年 6月9日 (月)　10：00～11：00 12月8日 (月)　10：00～11：00
場　所	駿河台キャンパス10号館内
内　容	袋詰めしたエコキャップ袋を業者の方に引き渡す
参　加	学生6名、職員2名
回　収	・個数95.000個 ・ワクチン95人分 ・CO_2：598.5Kg (キャップをゴミとして焼却した場合の発生量)
センターの役割	相談、当日対応及び立会、備品の提供 (駿河台)



文学部4年　舟木 瑠渚

エコキャップの引き渡しの際も、メンバーの協力が大きな力となりました。キャップを詰めた袋はかなりの重量があり、部室からトラック到着場所まで運搬する作業は特に大変でした。今後に引き渡しでは、破れやすいビニール袋ではなく専用の回収袋を使用することや、活動に参加する人数を増やすことを意識して取り組みたいと考えています。

Tree とは？

Treeは、駿河台ボランティアセンター直属の学生ボランティア団体です。

主な活動として、「エコキャップ運動※」、「ホームカミングデー」への協力、「明大祭」への出店などを行っています。この他にも、清掃活動、駿河台キャンパス近郊の地域で行われる行事の運営補助等を行い、地域社会に貢献する取り組みを積極的に行っています。

※駿河台キャンパス内にペットボトルキャップの回収箱を設置し、回収を行う。回収したペットボトルキャップは、民間事業者に売却し、その売り上げをNPO団体に寄付することで世界の子どもたちにワクチンが提供される。

スポGOMI＆エコ・ファースト企業×大学生 リアルトークイベント（Tree）

日　時	2025年12月13日（土）
場　所	新宿区立環境学習情報センター／対面
内　容	第一部と第二部に分かれており、第一部ではスポGOMI活動を行い、新宿中央公園周辺のごみを合計35キロ回収した。第二部では環境省が定める「エコファースト企業」の社員の方々と様々なトークテーマでディスカッションを行った。
参　加	7名
主　催	環境省



政治経済学部4年　関 健悟

第一部では、大学生と企業の方でチームを組み、町の中のごみを拾う中で、奉仕活動をしているといった充足感を感じつつも、一見きれいに見える道でも目を凝らせばごみが転がっており、一度目にしてしまうと逆にごみが目に留まるようになり、改めてきれいな景観を保つことの大変さを痛感した。

第二部ではエコファースト企業の取り組みや、実際に働いている社員のお話を聴くことができ、3年生は就活のことについて、4年生は実際の社会人生活のことについて詳細にリアルな意見を伺うことができた。個人的には、各企業ごとに簡単な自社のプレゼンがあったのだが、そこでの社員の方々のプレゼンの上手さが印象に残っており、自分も同じようなレベルに届くように努力したいと思えた。

この二つの活動を通し、社員の方々と接したことで3.4年生共々、社会人のイメージができ、とても良い経験ができた。





活動の様子

エコキャップ回収（公認ボランティアサークルぱれっと）

「気軽にできるボランティア」をモットーに環境系に力を入れて活動している公認ボランティアサークル「ぱれっと」が2008年から行っている活動です。

キャンパス内に設置した回収ボックスでペットボトルのキャップを集め、回収業者に引き渡します。その後、資源として売却され、売上を「認定NPO法人世界の子どもにワクチンを 日本委員会」を通じ発展途上国の子ども達のワクチンのために寄付しています。

日　時	通年　昼休み
場　所	和泉キャンパス
参　加	55名
回　収	約110kg（約44,000個、ワクチン55人分）
センターの役割	作業場所等の提供、回収したキャップの保管、連絡調整（和泉）



政治経済学部2年　戸丸 新

2025年度の活動では、毎週のごみ拾い同様、1年生を中心に多くのメンバーが参加してくれたこともあり、役割分担をしながら極めてスムーズに回収を行うことができました。毎回のように活動に参加してくれていた1年生には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。毎回の活動で回収ボックスいっぱいに詰まったキャップを見ると、嬉しい気持ちで満たされますが、今年度の活動の反省点として、回収の周期を決めていなかったために、予想以上に回収ボックスがいっぱいになってしまってキャップが入らなくなっているという事例が発生しました。そのため、来年からの現一年生を中心とした体制では、明確な回収周期を決めたうえで活動を行っていきたいと考えています。

神田すずらんまつり（Tree）

日　時	2025年5月25日（日）　10：00～18：00
場　所	神田すずらん通り商店街（東京都千代田区）
内　容	神田すずらんまつりの運営補助、エコキャップ回収活動、レモネードスタンドの出展
参　加	26名
センターの役割	連絡・調整（駿河台）



情報コミュニケーション学部4年　神藤 完太

レモネードスタンドでは、想定よりは下回っていたものの、1杯300円で売上金およそ23,000円という、一定の成果を出すことができました。お客様の中心は家族連れやお年寄りの方々、他大学の団体で、売上金を小児がん支援として寄付する活動と言う事から買ってくださる方もいて、寄付に対する意識の高さを垣間見ることができました。この金額から経費を除いた売上金を、全額寄付する予定です。自分たちが作ったレモネードを、目の前で「美味しい」と言ってもらう事ができ、やりがいを感じました。また、レモネードスタンドと並行して行ったキャップ回収活動では、すずらんまつりボランティアの一環として、ペットボトルキャップを集めることができました。この活動を含む、すずらんまつり本部の運営ボランティアには、Treeから3名参加しました。

一方で、全体を通した反省としては、活動への主体的な位置づけが不十分であった点が挙げられます。時間の経過とともに、「やることがない」と感じるメンバーが増え、雰囲気としても受け身な姿勢が目立つようになりました。全員がこの活動の意義を再確認し、自分の役割を自発的に見いだせるような仕組みや声掛けが必要であったと痛感しています。今後は、目的の共有や適宜のコミュニケーションを通じて、一人一人が意義を感じ、行動できるような環境創りを意識して取り組みたいと思いました。



神田すずらんまつりの様子

華を楽しむ会（Tree）

日　時	春学期　2025年6月21日（土）　13：00～15：00
場　所	錦華公園周辺花壇
内　容	神田猿楽町地域の花壇の整備、植え替え
参　加	春学期17名
センターの役割	連絡・調整（駿河台）



商学部4年　正岡 千奈

今回の「華を楽しむ会」は、ボランティア活動の一環として、サークルの仲間とともに花を植えた経験を振り返りながら参加しました。自分達が手をかけた花々が会場を彩り、多くの方々に楽しんでいただけたことに大きな達成感と喜びを感じました。

また、花を通じて地域の方々や参加者の方々と交流が生まれたことも印象的でした。準備の段階から当日まで、仲間と協力し合いながら一つの場を作り上げる楽しさや、花の持つ癒しの力、人と人をつなぐ力を実感する事ができました。今後もこうした活動に積極的に参加し、地域や自然と関わる機会を大切にしていきたいと感じています。





華を楽しむ会の様子

千代田区防災フェスタ（Tree）

日　時	2025年9月28日（日）　8：00～16：00
場　所	日比谷公園
内　容	千代田区主催の地域防災イベントにて、来場者のサポートや体験プログラムの運営を行う
参　加	16名



文学部4年　舟木瑠渚

当日は子どもから大人まで幅広い年代の来場者が訪れた。長時間にわたる開催であり、インフォメーション対応や来場者のカウント、ワークショップ運営、スタンプラリー対応、撮影、会場設営など多岐にわたる業務を担当していたため、やりがいのある活動であった。新聞紙を使ったスリッパつくりや白バイ乗車体験は特に子ども達人気があり、地域の方々が防災について考える良い機会となっている様子がうかがえた。私達にとっても、これまでの活動ではあまり関わる機会のなかった「防災」という分野の一旦に触れることができ、貴重な経験となった。大変有意義な活動となった一方で、幹部による振り返りでは、集合時間が早かったことや当日の暑さ、各ブースにメンバーが分散してしまう点などが課題として挙げられた。これらを踏まえ、来年度以降の参加については検討していく余地があると考えられる。

コラム

植林活動を通して見えてきたこと

文学部3年　**阿部 隼也**

公益財団法人日本財団ボランティアセンター主催
ボルネオ島「オランウータンの森再生プロジェクト第9陣」に参加

はじめに

私がこの活動に参加した理由は、大きく分けて三つあります。

一つ目は、環境問題を「自分事」として捉え直すためです。これまで本などで積極的に調べてきましたが、自分の行動を大きく変えられず、どこか情けなさを感じていました。だからこそ、現場の空気に身を置いてリアルに体感したいと考えました。

二つ目は、植物への興味です。日本とは全く違う環境で、私が普段育てている熱帯植物たちがどのように自生しているのかを、この目で確かめたいと思っていました。



植林活動の様子

三つ目は、日本とボルネオの歴史に向き合うためです。太平洋戦争期の歴史的なつながりを、資料だけでなく現地に足を運ぶ事で、日本人として主体的に理解したいと考えました。

現地での活動

メインである植林活動は、想像以上にタフなものでした。生い茂る下草を刈る整地作業は、暑さと湿度もあって体力を激しく消耗しましたが、持続的に苗を育てるためにはこの工程が何より重要だと身をもって知りました。

植えたのは、現地の人々が食べたマンゴーなどの熱帯果樹の種から育った苗です。それをプロジェクトが買い取る仕組みになっており、森林再生が地域の暮らしを豊かにする温かい循環に、深く感銘を受けました。

また、植物の成長が早い熱帯では、植えた後の継続的な管理が欠かせません。滞在期間が限られる私たちが最後まで見届けられない悔しさはありましたが、この活動は現地のビダユ族のスタッフや、未来の学生たちへとバトンが繋がっていくものです。自分の手を離れた後も続いていく大きな取り組みの一部になれたことに、深い意義を感じました。

おわりに

活動を終え、環境問題は完全に私の「自分事」になりました。帰国した今もボルネオの森に想いを馳せ、世界の森林破壊への危機感が頭をよぎります。今後はさらに学習を深め、またあの地を訪れたいです。

言葉の壁に苦戦しながらも、環境や文化といった複雑な現実を志が高い学生たちと学べたことは、一生の財産になりました。また、博物館や建造物、クチンの街を巡る中で、歴史が環境や経済、人の生活と地続きであることを実感し、歴史を学び続ける意味を再確認できました。

このかけがえのない経験は、多くの人の支えによって実現しました。いただいたたくさんの温かい想いをただの思い出で終わらせず、これからの行動や発信を通して、社会や世界へ恩返ししていきたいです。

資料

ボランティアセンター来室者・活動参加者

	来室者※	うち学生※	活動参加者※※
2013年度	6,057	5,468	
2014年度	6,913	6,216	
2015年度	8,321	7,647	
2016年度	9,417	8,873	
2017年度	10,239	9,581	
2018年度	12,305	11,633	2,601
2019年度	12,008	11,403	2,347
2020年度			2,304 ※※※
2021年度	2,241	1,996	1,824
2022年度	3,478	2,988	2,184
2023年度	3,915	3,308	2,120
2024年度	3,893	3,306	1,917
2025年度	3,693	3,109	1,684
累　計	82,480	75,528	16,981

※対面での数。
※※対面又はオンラインで、センターが主催・コーディネートした企画の活動参加者。2018年度から集計。
※※※2020年度は、全てオンラインでの数。

外部事業への協力・取材など

外部委員委嘱

・杉並区社会福祉協議会杉並ボランティアセンター　運営委員
・杉並災害ボランティアネットワーク連絡会　委員

発行物



明治大学ボランティアセンター
パンフレット



















2025年度　明治大学ボランティアセンター活動報告書
発　行　日　2026年10月発行
発　　行　明治大学ボランティアセンター